

御所櫻堀川夜討

第一

恩は春のごとく、威は虎のごとく、訓は父のごとく、愛は母のごとくと、李嚴を誦ひし史民の詞、今此時に當れるかな。六十餘州の總追捕使、右大將頼朝卿、仇を討つこと爐上一點の雪のごとく、流れをたどす氏の再興、世はうごきなき鎌倉御所、威嚴四海に凝形せり。されば兄に宜しく、弟に宜しうして國人を教ゆといふ。御舍弟九郎判官義經を都にするおき、兄弟東西に立別れ、民を撫育ましますば、御中水魚の如くなるべきに、月明かなりといへども、光を雲の覆ふがごとく、梶原父子が支へによつて、忽御中吳越とへだたり、穩ならぬ世の聞え、萬民心意を惱せり。重ねて討手を上さるべしと、召によつて在鎌倉の諸大名、問注所の廣庇に相詰むれば、頼朝仰出さるよは、「扱も義經色に溺れ酒に長じ、禁裏の勤を怠り、我儘の行跡、剩へ平の時忠の婿に押成り、平家の連判狀頼朝見ようず、鎌倉へ下せと再三いひやれども、兎角事によせ隠し置く心底、景時が申すにたがはず、一定叛逆に極つたり。所存有れば名を指い

て、誰たれ參まゐれと下知げちはせず、覺おぼえらん者もの討手うてにのほり、義經よしつねが首取くびとつて高名かうみやうせよ。恩賞おんしやうせん」と宣のたまへども、「恐おそろしく、摩利支天まりしてんの再來さいらいといふ判官殿はんぐわんどのの御討手おんうて、我々われが力ちからに及およばず」と、目めを見合みあするばかりにて、誰たれ上のぼらんといふ人ひとなし。こゝらへ兼ねて梶原平三景時かぢはらへいざうかげとき進いみ出でて、「斯様かやうの時ときの御役おやくに立てられん爲ため、身に過ぎたる莫大はくだいの所領しやうりやうを給たまはりながら、名なを指さいて誰參たれまゐれと御誕ごたんなきは、恐おそれながら如何いかなる御所存ごしよぞん、お請申うけまうさぬ方々かたがた一々見知り置おく、此返報このへんぱうの時節待じせつまちたれよ」と睨め廻ねまはし、「ヤア人ひとまでもなし平次景高へいじかげたか、汝討手なんぢうてに罷上まかりのぼり、御心みこころを安め奉やすまれ」畏かしこまつて領掌りやうじやうす。末座はつざに候まうひし澁谷土佐坊昌俊しぶやどさぼうぢゆん、「南無三寶なんぶさんぼう、彼奴きやつを討手うてに上のぼせては、義經公よしつねこうの御大事おんだいじ」と分別ふんべつし、御訴訟ごそしやう々々と聲こゑをかけ、御座ぎやざに向むかひ、「御兄弟ごきやうだいの御中おんなかと申し、歷々れききさへ口を嚙くはぎ給たまふに、我等式われらしきの御討手おうてと申まうすは憚はづかりながら、某罷上それがしまかりのぼり、御首おんくびを給たまはらん。さりながら、事ことあたらしき申し事ことなれども、木曾の強敵かうてき、平家の大軍へいかのだいぐんを一いち時に責せめはらし給たまひしは、君きみの武威ぶゐ全まったき故ゆゑとは申せども、一つは義經公御身よしつねこうおんみを捨てよの御働おんはたらき、酒宴遊興しゆえんいうきやうに溺おほれ給たまふは、實じつは御年若おんとしわかき故ゆゑ、よりより御諫言ごかんげんを加くわへ給たまはゞ、直なほさせ給たまはで候まうふべきか。又平時忠またたひらのときたけの婿むこに押成おしなり給たまふ事こと、尤彼時忠もつともかのときたけ平家の何某なにがしとは申せども、降參かうさんを聞き請うけ、命いのちを助け置たすかるゝ上うへは、娘むすめを召よさるゝ程ほどの事ことは、さして御誤おんあやまりとも申まうされず。就中平家一味なかつづくへいけいちみの連判狀れんはんじやう」と言いはせも立てず平三景時へいざうかげとき、「ヤア詞多ことばし

昌俊、判官殿の叛逆、事極まつて評定の上仰付けらるゝ討手、御邊は何と聞く、其咎をし
らためるに、和殿風情は頼まず」と一口に言ひ消せば、居丈高に成り、「是梶原殿、其評定の
衆は誰々、其人こそ心得ぬ、斯くいふ昌俊は金王丸の昔より、累代源氏の御家人、鎌倉殿も
主、判官殿も主命によつて主の討手、大體で向はるべきか」「ナ、其詞で知れたく、遙々都
へ上つても、誠らしく言譯を聞かば、首を給はるまでもなく、素手振つて歸るは知れた事、い
やたど討手は景高に仰付けらるべし」と、遮つて申せば膝立直し、「ならぬ事く。昌俊が望
みかゝつては、頭が舍利に成つても餘人は上さぬ、義經の御首は、此昌俊が給はる」「和殿
しかと取るべきか」「くどいく」「ハア、天晴の忠臣、然らば君の御心を休むる爲、一紙の
起請文違背は有るまい。ヤア景高、君にかはつて文言を望むべし。誰か有る、熊野の牛王、硯
を昌俊に參らせよ」と、退引ならぬ手詰に成り、よし／＼誓詞は書くとても、神は非禮を請
け給はず、我が一命を忠義にかへ、都に上つて義經の、御爲あしくは計らはじ」と、些とも辭退
の色目なく、景高が望むに任せ、筆押取つてさら／＼と、一紙の起請かくばかり、「謹しんで
申す起請文の事、上は梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、下界の地
には伊勢天照大神を始め奉り、伊豆、箱根、富士、淺間、熊野三所、金峯山、鎌倉の鎮守鶴が

岡の正八幡大菩薩、氷川、鳥越、根津權現、總じて日本の大小の神祇、冥道請じ驚かし奉る。殊には氏の神、全く昌俊討手に上り、義經の御首を給はらずんば、骸を堀川の御所に埋み、再び鎌倉へ歸るべからず。此事偽有るに於いては、此誓言の御罰を蒙り、來世は阿鼻大地獄に墮罪せられん者なり、よつて起請文此の如し。文治元年今月今日昌俊」と、筆を振うて書きたるは、身の毛もよだつばかりなり。頼朝御機嫌なよめならず、「頼もしき土佐坊が心底、假へ都の土と成るとも、子々孫々の末までも所領を與へ、些か疎略有るまじ。平次景高も一所に上り心を合せ、義經に出で逢ひ、二ヶ條の非義を糺し、越度に極らばゆめくいたはるべからず。斯く言はど人々の我を情なしと思ふらん、叛逆野心有る者は、兄弟とてもゆるさずと、我より手本を顯して、下萬民に訓ゆる事、源氏の威光長久のしるしぞかし、時節を移さず打立つべし」と、沙汰こまやかに御説有り、簾中に入り給ふ。治極つて亂に入り、亂極つて動きなき、賑ふ民の鎌倉山、嶺に立つ木や這ふ草も、随ひ靡かぬ三重方もなし。鎌倉殿の詔意を受け、直に打立つ土佐坊昌俊、梶原平次景高、上使の威勢かさ高に、路次の行列美を盡し、夜を日に次いで東海道、伊勢路も跡に水口や、石部の宿の本陣に、泊り賑ふ勝手の混雜、料理拵へ組板の、音もてきく亭主が馳走、

手をつくしてぞもてなしける。相役といひ、心へだてぬ昌俊、景高、家來番場の忠太諸共、打寛いで奥座敷、勞を晴す折こそあれ、取次の侍罷出で、「平の時忠様、家來鮫島藏人を召連れられ、密に御逢ひなされたき旨、通し申さんや」と伺へば、昌俊聞いて眉をしわめ、「是さ景高、此度我君判官殿に御咎は、則ち時忠父子の儀なるに、其時忠是へ參られしとは訝しよ」「オオ不審尤、彼時忠卿とは、某かねて懇意の中、折入つて頼む仔細、先達てあらまし申遣せども、出合へば幸ひ、貴殿にも引合せ、打寄つて内談せん。それく忠太、案内せよ。是へ通せ」と、いふにしたがひ立つて行く。さとき昌俊、詞のはしぐ聞取つて、「ホ、ウ何かは知らず、内談とあれば聞内、しかし旅づかれか、何とやらしきりに心地あしければ、座に列なる事思ひもよらず、貴殿が様子を聞かれば、某が逢うたも同然、無様ながら病氣の事、御容赦有れ、暫く次に養生せん。委細は後刻承らん」と、障子押明け入りにけり。忠太が案内に打ちつれて、時忠主従しづくと席につき、「先達て書狀に言越さるゝ趣、他聞を憚る密事なれば、上著なき内、篤と内談いたさん爲、參つたり」と宣へば、「是はく御苦勞千萬、此度鎌倉殿の御疑、誠判官に別心なくば、預り置かれし廻文を差上げ、貴卿御父子の首討つて渡されよとの御誕、某承るといへども、僥略にならぬ貴卿の御事、御命に恙なきやうと存する某が一分別、

義經が手に有る彼の廻文、密に奪ひ取つて給はらば、夫を越度に責め付けて、義經に腹きらせ、貴卿御父子の御命は、此梶原が受合ひて助くる所存」と、そやしかくれば、「ホ、それこそ手前が願ふ所、義經が滅亡せば、日比某が心をかくる静も自然と手に入る道理、召しつれし此鯨島藏人は忍びの名人、主従心を合す程ならば、廻文はおろか、龍の腮の玉なりとも、奪ひ取つて渡すべし」と、額と額摺合ふばかり、密々咄、障子の隙間に昌俊が、見るとも聞くともしらばこそ、梶原主従猶すり寄り、しかし大切な廻文、中々輒く奪はれまじ。但手がかり手だてもありや」「オ、其儀はちつとも氣遣ひ遊さるゝな、案内知つたる此藏人、盗み出すは明六日の丑三比、御所の高堀見越の松を目印に、忍んで待たれよ忠太殿。相圖の詞は此方から、番かといはゞ、ヲ合點、忠と答へて受けとらん」それよくと、互にうなづきあふみ路や、深き工の湖も、「洩らすなぬかるな、同道するも危な物、時忠卿はお先へござれ、此方は勢田へ廻道、必ず見ぬ顔知らぬ顔、氣取られぬやう合點か」と、互の契約釘鎌鎧、念に根つぎの石部の宿、別れてこそは三重。かはる世や、昔は平家の小舅君、今は源氏の大將を、婚に取つたる身の威勢、平の朝臣時忠卿、譜代の家の子鯨島藏人秀氏一人めしつれて、工も深き堀川の、大下馬前にさしかより、「ヤア、藏人、兼約のごとく、梶原の郎黨番場の忠太が来りなば、日比の大望、必

「す今宵は過されず、手筈を違へな氣取られな」と、主従囁きうなつき合ひ、御門外に立寄つて、
「判官殿へ火急に申入るべき仔細有り、平の時忠推参」といひ入るれば、門番の侍飛んで下り、
貫木扉ぐわつたりひしめき海老錠の、腰折りかどめ出向ひ、「夜更けての御出、何とも申し兼
候へども、折あしき主人の他行」と、聞きもあへず、「イヤサ皆まで申すな、婚義經某が娘
京の君は懷妊せしとて、此方へ戻し置き、毎日毎晩九條の里に遊興と聞き、異見の爲に來りた
れば、たとへ明日まで相待つとも、對面せずんば有るべからず」と、鮫島諸共入り給へば、跡
は御門もしめやかに、拍子木の音いちちはやく、更行く空の影冴えて、衆星北に拱し、明方ちか
き白壁に、映る姿は影法師か、それかあらぬか、見上けるばかりの大男、頭も足も眞黒に、包
む人目のせき拂ひ、相圖と思しく築地の上に、鮫島藏人顯れ出で、「番」と一聲呼びかくれば、
「忠」と答ふる相詞、「扱は番場の忠太殿か、刻限違へず能くぞお出で、首尾よう廻文盗み出し
た。お渡し申す」と一卷を、包む服紗の錦さへ、闇は黒白なやあやふき思ひ、受取りかへる向
より、同じ出立の黒装束にて、又によつこりと出來り、番といへども以前の忍、忠とも答へず
すりぬけるを、「扱こそ曲者ござんなれ」と、道を遮り拔討に、弓手の肩先切られながらいく
ぐり、拔身をもぎ捨て逃け行くを、後抱にしつかと組めば、藏人すかさずひらりと飛下り、敵

か味力みかたが暗くらさは暗くらし、後うしろに來きたりし侍さむらいが、兩足りやうあしかいてのめらせば、命いのち冥みやう加がな手負ておひの忍しのび、廻文くわいぶん大事だいじと逃にけて行く。跡あとには兩人りやうにん組合くみあひ捻ひねり合あひ、四よつ手てに成なつて、互たがひの頭巾づきんと頬被ほくべに、一度いちどに手てをかけひつたくつて顔見合かほみあせ、「エ、イ藏人くせんじんか」「ヤア忠太ちゅうたか」「二人ふたりこりやどうぢや」と、興きようをさめ島じまうろたへ廻まれば、「イヤサ是これ、盗ぬすみ取とつた廻文くわいぶんは、ナ、なんと」と、問とふも語かたるも氣きはいらだて、「サ、されば、紛者まざれんの心こころは付つかず、今いまの奴やつに」「エ謀たはかられたか無念むねん々々。程ほどは行くまい、追おつかけん」と、二人ふたりつれ行く取とりなりは、阿呆あほう鳥がらすのかあく、と、夜よは明渡あけわたる 三重さんじゆう。戀こひをする身みはいよ伊達だてらしや、おも白無垢しろむくに染小袖そめこそで、裾吹すそふきかへす朝風あさかぜに、揉もまれもまるよはぎの露つゆ。義經ぎけいコレ靜しづか、廓くわくと違ちがうて、四角四面しかくしめんな屋敷やしきの内うちで、あの風流ふうりゆうな唄うたと三味さんみ、てんとたまらぬ道中だうちゆう姿すがた、可愛かはいらしい」と抱付だづつき給たまへば、「オ、辛氣しんき、御所ごしよの女中方ぢやうがたの見みさんして、我君わがきみを手てに入れ、自慢じまんと思おもはんす所ところも氣きの毒どく」と、ぴんとする河がの次郎じちろうが引取ひつとり、「イヤ申し、其そのお氣遣きづかいなされますな、京きやうの君様きんさまは、御懷妊ごくわいにんゆるゑお里歸さとがへり、そこでお前まへを根引ねびきにして今日の御館入おやかたいり、搗婦うりて禿かぶも連つれられぬが一趣向ひとしゆかう、はやお忘れわすれなされしか」と、心こころを付くれば、義ぎ「オット誤あやまつた。今日某けふそれがし、搗婦うりてのお芳よし」常つねとは違ちがうて、小袂搔取こづまがいでりちよこくくと、義ぎ「申し太夫たいふさんえ」次つぎ「オ、それでこそ搗婦うりてぢや。扱さて是これから拙者せつしやめが禿かぶの役やくを仕つかまつる、眠ねむらぬを取とりえに、嵩高かさだかなは了簡りやうけんあれ」と、い

へば静もをかしさに、「禿のはれはもの言ひが第一、こいよ」次「ナアイ」静「もうそれが禿でない」と打ちこまれて、次「ホンニさうぢや、奴の返事と取違へた。ヤア、女房達、静様の花のお入、お盃を持参あれ」と、呼ばれくるわに品かはり、島田 笄 髷長な女中方、鉤子島臺取揃へ御前に出で、「御舅時忠様夜前より御出有つてお待ちかね、御對面もや」と伺へば、善ウム夫れで聞えた、最前の一節も、時忠殿を汝等が慰よな。我等に逢ひたいとは、廊通をやめにせよと、例の異見煩しく。ナウ静、此程は揚屋々々の暇乞に、全盛の大酒盛、其處をとんと氣をかへて、あの堅くろしい腰元共を、相手にするも面白かる、飲んで獻しや。禿よ早う酌をせい」アイと返事も長柄の役をする河の次郎、君が仰につぎかくる、玉の盃底ひなき、御酒宴半に廣間より、「源八兵衛尉 廣綱、御見参」と披露して、切腹したる武士の死骸、戸板に載せて庭上に昇きするさせ、「今日 某御所の御番に相當り、早天より出仕いたし候所に、昨晚の御留主預り、鎌田藤次政經、あのごとく自殺仕る、様子は此書置に明白たり」と、一通を差上ぐれば、繰返し、披見有るより、忽怒の御顔ばせ、飛びかゝつて静を捻ぢふせ、「ヤイ女め、汝鎌田藤次と忍び契りしな、今日の館入を無念に思ひ、彼通腹切つて、書置に不義の段を顯したるは己への頗當、かゝる後めたき事を隠した天罰の程覺えよ」と、長柄を

押つ取り、纖弱き脊骨をちやうくく、銚子の酒に身はひつたり、花を粧ふ衣紋も亂れ、わつと涙にむせびしが、「エ、お情ない氣の廻り、そもや君の目をぬいて、悪性しさうな靜ちやと、思し給ふか曲もなや。身の言譯は有りながら、證據になる相手は切腹、何をいふとも死人に文言、不義淫の名を取つて、先だつ命はいとはねども、老いたる母の磯の前司、兄様は有りながら、親に不孝な生れ付、わらはが死んだ其跡では、嘸母様の便なかる、未來の迷は是一つ。二人の衆、なぜに留めて下さんす。いつそ君の御手にかけて、殺してたべ」とばかりにて、恨啣ちて歎きける。「オ、望の通、鎌田が冥土の供させん」と、白洲へはつしと蹴落し給ひ、「駿河次郎あれ計らへ」と有りければ、源八兵衛憚なく、「コハ御短慮なる御仰、流の女の偽表裏は天下晴れたお定、それを何かと御遺恨に思召すは、智勇兼備の名將に似合はぬ、御心がせまいく。殺さず痛めずあの儘に捨置いて、死骸の番をさするのが好き成敗、皆々引け」と人をよけ、「先御入」と諫むれば、靜は堪へかね、「コレなう申し」と立ち寄るを、駿河が隔て、「何處へく、もう泣言は叶はぬ、我君に見はなされて、身の立てらいがならずば、近々に五條の橋へ來たが好い、千人斬の時お手にかゝりし者のゆかりへ、御施行が有る筈、其役目は此清重、此方も君のお手にかゝつた人なれば、千人斬の施行の人数に入

れて、施のお銀いたゞかせう」と、惡口たらく、主従打つれ奥に入る。跡に靜はたゞ獨、涙にくれて居たりしが、藤次が死骸の一腰追取り、既に自害と見えける後に、「ヤレ待て」と馳出づるは時忠卿、「むだ死するか」と押しとめられ、「無駄死とは曲もない、なんと是が生きて居られう、留めずと死なして下さんせ」と、振りはなすを猶抱き留め、「最前よりの始終、物蔭にとつくと聞いた。あつぱれ汝は女に稀なる心中者、其心底を見る上は何をかくさん、元來京の君を義經に嫁せしは、餌にかうて肌をゆるさする一つの方、今死ぬる命を存らへ、兼々くどく此時忠にはなぜ従がはぬ、命取め」としなだれ給へば、「エ、イそんならお前は義經公を殺すお心か」「ア、音高し、人や聞く」と、前後を見廻し給ふ所へ、とつたくと捕手の役人、十手打ちふりおつ取りまく。上段の御簾さつと捲き上げ、九郎判官義經公、有りしにかはる御出立、装束改め、源八兵衛廣綱、駿河次郎清重、左右の翼と隨ふにぞ、飛龍の氣を呑む御大將、悠々と床几に直らせ給ひ、「ヤア靜、覺えなき身のしばしが間も不義者といはれ、噓いぶせく思ひつらん、斯く計ひしは時忠の惡逆を顯さん爲、罷立つて休息すべし」と宣へば、扱はと悦び靜御前、袖は涙に濡衣の、面目すゝぎ入りにける。「ヤア時忠殿、京の君を餌に、此義經に肌をゆるさせしと宣ふが、此方は又靜といふ餌にかより、巧まれし謀叛を見すかされ、さぞ本意な

くおほすらん」と、仰もあへぬに時忠卿、からくと打笑ひ、「扱はかゝる仰々しき有様は、靜にたはむれし事共を、聞きはつよての疑よな。それしきの儀を取上けて、謀叛とは近比粗忽」「イヤ此期に及んで言ひぬけんとは、未練の一言、昨夜平家の廻文を盗まれ、申譯の爲に腹切つた鎌田の藤次を、靜と不義の體にもてなしたも、其元の巧見出さう爲の偽、廻文の行方も、此方の胸に覺が有らう。然れども此詮儀は所存有つて用捨いたす、差當つて謀叛でないとの申開 承らん」と、席を打ちて宣へば、「イヤサ先達て娘京の君を遣し置いたが、某に二心の無い好い證據」と、あらがひ給へば源八兵衛、「然らば最前の謀に載せられ、義經公を亡さんと有りしは如何に」「イヤそれは」源八「サアなんと」と問ひかけられて、「ホ、それこそはよき紀明、靜を我手に入れ、判官と娘が中を睦まじくあらせん爲に、戀路の闇と見せかけて、誠は子故の闇なるぞや」源八「ヤア戀路でも子故でも、闇盡の言譯暗い」と、いふに氣ばやき駿河次郎、「最早御詮儀には及ばぬ、叛逆に極まつた。アレ搦めよ」と下知すれば、又ばらくと詰寄るを、「ヤアはやまるな」と、判官捕手を制し給ひ、「かくあらがひの上からは、招き置いたる訴人を是へ呼出せ、はやとく」との命に應じて、源八兵衛廣綱が、伴ひ來るは時忠の御臺所、兼て覺悟の心にも、かはる浮世の數々に、思ひなやみ立ち給ふ。時忠見るより嚇とせ

き上げ、「エ、につくき女め、夫の訴人好くしたな」と、言はせも果てず義經公、「ヤア其一言が謀叛の證據」駿河源八、「承る」と雙方より、「捕つた」とかよるを御臺は目もくれ、氣も狂亂のごとくにて、「其總目が悲しさに、幾度かく、妾が留めし異見諫も用ひなく、過去りし平家の一門、非道奢の天の責にて、亡びしとは氣も付かず、仇よ敵と狙ふは聲の判官殿、連れ添ふ娘が難儀と成るも顧みぬ謀反の企、愚な女の思案より訴人して、其訴人の恩賞に、夫の命たすけてと、詞を番ひし甲斐もなく、此縛は何事ぞや。殺さでかなはぬ道ならば、自らを代に立て、連合をゆるしてなう判官殿」と、前後不覺に嘆かるれば、時忠卿も今更に、御身の惡事の數々を、思ひしら洲に差しうつむき、面目なみだにくれ給ふ。大將しばらく御應もなかりしが、「オ、女氣の一途に恨まるゝはさる事ながら、今鎌倉には梶原有りて、やゝもすれば讒言をかまゆる時節、聲舅のよしみ有る故、結句用捨成り難く、繩かけさせたは政道の一條、契約の通、訴人の功に命を助け、能登國鈴の御崎へ流しつかはすべし。早とくく引立てよ」との御諫に隨ひ、警固厳しく左右を圍み、配所をさして追立て行く。御臺は有るにもあられぬ風情、「如何なる沖つ島守とも成らばなれ、夫婦諸共やつてたべ」と、せき入りくくどかるれば、義經公聞召し、「そも流殺の法は、黃帝の御代に始つてより、妻子を相添へながしたる先例

なければ、鎌倉への聞え、旁々以つてかなはぬ願ひ、いたはしながら、御臺はこなたへ伴ふべし」と、簾中さして入り給ふ。斯くと聞くより、鮫島藏人秀氏、一味の悪黨從へて駈け來り、「ヤアア駿河源八兵衛、何もかも皆聞いた。主人時忠の無念晴さん其爲に向うたり、覺悟ひろけ」と呼はるにぞ、「ヤア時忠卿に謀反をすよめし親粒の鮫島め、束の間もゆるしは置かぬ」と、二人は夜叉の荒れたるごとく、猛勢一度に切つてかゝるを事ともせず、弓手馬手へ殖立てく追捲れば、言甲斐なくも鮫島藏人、迷惑うてうろつく所へ、駿河源八一散にかけ付けて、嫌ほんどふみのめし、「此奴が様なへろく侍、刀で殺すは大人氣なし、鮫島なれば片身づつ」と、兩足左右へ引張つて、ヤアエイくのかけ聲にて、さらくさつと引裂き捨て、勝色見する梅の間松の間柳の間、御殿々々をかり立てく、爰は所も櫻の間、緋櫻ちらして、彼岸櫻のちりぢりばつと、逃散る敵の犬櫻、一重櫻蒲淺黄、天狗櫻や虎の尾の、勢有りあけ月花の、都の外の外までも、二人が武勇の譽は高き山櫻、枝をならさぬ源氏の御代、浪靜なる堀川の、御所の櫻ぞさかなる。

施は財と法と無畏の三つ、權者の詞盛んなるかな。九郎判官義經いまだ牛若たりし時、五條の橋の千人斬りと、世の取汰沙も年月も早十三年、千人供養遂ぐべしと、橋詰に假舎をうたせ、幕の中には駿河次郎清重、斬られし者の月日刻限、日次の扣に引合せ、御施行をひかるべしと高札を立てければ、洛中洛外の町人百姓、聞傳へく、おれも切られた、娘も切られたと、毎日五人十人宛、疵言立に笹原を、橋詰にこそ詰めかけたり。かよる所へ源八兵衛廣綱「御廟參の次ながら、お見舞申す」と假舎に通れば、「是はく廣綱殿、今日は頭と殿の命日、御菩提所へ御代參か、嘸御苦勞」「いやく何の苦勞、誰あらう義朝公の御命日、源氏の祿を食ふ者、月の三日は、廟參せではかなはぬ。して御自分の役目の千人供養は」「さればく、日を逐つて漸と、人數の都合も今少し、あれへ詰めたる三四人、九百九十九人、さりと是我君、御若年の時なれども、僧正坊に習ひ給ふ劍術の手ひどさ、いつかなく、刃向ふ奴もないと見えて、毎日々々來る人に、手疵おはぬ者はなく、其時は平家の世盛り、往來の剛臆を見て味方に付ける御所存なれば、一命を果す程の深手もなく、萬一死たる者には、親類によらず、縁者の端にも格別に、弔料下さるゝ」「フウ、したりく、今草木も驕く源氏の御代、斯様の施なされぬとて、誰がぐつと言はねども、下を恵む御仁心、天晴源氏の好き礎、ヤア何か言ふ間に、御代

参おそなはる、さらばく」と源八兵衛、別れて御墓へ詣でける。駿河次郎日次の大帳押開き、
 「コリヤく、汝ら最前も言ふごとく、我君の覺書に、少しにても相違有らば、御施行は渡され
 ず、銘々其夜の物語、早とくく」と有りければ、雑色供人いかつけに、「出ませく」の聲に
 随ひ立出づる、年は四十の肩で風、「ぶうく仲間の立者と、人より先に鳥羽の里、車遣の其
 中で、腕に覺の若盛、往來をなやます天狗の若衆、出合うて見たさにわざく」と、一里餘をき
 さらぎの、晦日の夜に暗がりから、牛若様とは重荷に小附、祝ひ額を此の如く、切られました
 は丑の時、まうとう違ごさりませぬ」と、語りける。ヲ、其詞も合鮫の、古びた一腰さつするに、
 禰宜の中でもかすけの天窓、願かけてきられしは、口先ばかりで世を渡り、商賣とはせん本
 通、軍書歌書の講釋師、「其頃は地主祭、夜講釋して歸るさ、しかも春雨しきりに降つて氣味惡
 く、たゞ一人橋臺に差しかゝれば、暗さは暗し、墓地に討つてかゝる、受けつ開いつ、追ひつ
 まくツつ、判官様は欄干傳ひ、擬法珠に片足立て、慥切つたと思うたは違はず、草履の鼻緒踏
 切つて、振けつ轉びつ、なう悲しや人殺と、たつた一聲ゆふ顔の、五條あたりのしるべへ駈込
 み、あまの命を拾ひし」と、おのが家業の仕形咄、今見る様にしやべりける。それに違も「な
 いないく、身共は御所のお道具持、御覽の如く奴めが、髭と尻とは晴れ道具、其尻をしたと

かに切られたは一昔、土用八専寒の入は、慥にうづきの十八日、お観音の下向道、清水坂に契を結び、安物に通ひ樽、ころりと明けた酔機嫌、しやつぶり一太刀、劔も折れるは大悲の誓、まさかのときはかなはぬ、夫れから再び此橋へ、紺のだいなし看板を、うたぬばかりの迹疵痕、御施行も疵相應に、すつしりでござりませう」とかつつくばふ。駿河次郎は月日刻限、一々に引合せ、「汝らが詞に違はぬ、是で九百九十九人の帳而済む、必々お上の御恩、仇疎かに存するな」と、銀子も一枚平等に、足り不足なく與ふれば、「やれ忝や有りがたや、お銀子貰うて尻切らるゝとは、正眞の譬の裏、斯様の事なら、千人切にまあ五六度もあうたらば、閨の有る大晦日の拂の足しに」と打笑ひ、別れゝに歸りける。跡へ来るは誰ぞとも、三十餘の女房、綿帽子眉深に顔かくし、世帯染みても爪はづれ、只ならぬ日の物詣で、櫓に念珠繰り添へて、假屋の前に手をつかへ、「私は日の岡に住む浪人の妻、連合の父御、わらはが舅、其時はまだ六十に足る足らず、春の日の長きを暮しかね、都は花の最中、氣延しに見物と、浪人の鍔刀、衣裳は汚れ垢づきても、心は汚れぬ武士の浪人、嫁女、留守能うおもしろやと暇乞なされし、其弟が此世の見納、知らせによつて駈付け見れば、此橋に切殺され、敢なき御最期取りまぜて、夫は奉公稼の留守、姑御を始めわらはが歎を御推量、跡で切人は判官様と聞きたれども、恨みつ

らみも人により時によると、思ひくらせし年月も、十三年のお弔ひ、是はまだしも奇特な事、望み有る舅の命、外々よりも經念佛、たんと唱へて冥途の妄執、晴らして進せて給はれ」と、目には涙を持ちながら、言ふ程の事しとやかに、武士の妻とはしられける。語る中より駿河次郎、只フウ／＼と小首をかたむけ、「先待て女、見る通り、千人供養も最前の三人にて、九百九十九人の人数、悉く揃ひ、千人目は武藏坊辨慶にて、お帳面もしまる所に、思ひもよらぬ只今の物語、一圓に合點ゆかず、其の又月日は」「アイ、則ち今日が舅御の祥月命日、齋米持つて墓参りが慥な證據、見す／＼切られて逝た人を、覺えないとは御卑怯、良人は武士の浪人と聞き、お主思の偽か」と、せきにせて詰めかくれば、「默れ女、天下晴れた千人供養、そちが夫を鬼神にもせよ、武士の虚言を言ふべきか、我君の手にかけ賜はぬといふ證據、せかすとも心を鎮めとつくと見よ。月の三日は休日と、日次の控へに記し有るは、御父義朝の御命日、人は勿論魚鳥の殺生さへ戒め給ふお精進日、其日に限り汝が舅、何故殺し給ふべき、ナ合點がいたか」とくよめる様に語れば驚き、「エ、イ、そんなりや外に殺人が」「ある／＼、察する所、老人に意趣有る奴、切殺して千人切につきませ置きしに疑なし」と、聞いて女はハアはつと、しばし詞もなかりしが、「御覽のごとく身分貧な私、無い事も有る様に言ひなし、施行のお銀を食るか

と、御蔑しきも恥かしや。外に殺人有らうとは、夢にも思ひがけもなく、せいた儘の惡口雜言、御赦されて」と立上れば、「オ、疑ふも尤、親を討たれし夫が心根推量せり。身共は駿河次郎清重、用事有らば館へ來た」と、慈愛の詞に一禮のべ、春の日脚も八つ頭、暮れるにはまだ程遠き、日の岡さして立歸る。折から梶原平次景高、頼む鮫島藏人は、義經に討取られ、盜取つたる廻文も奪はれ、若しは尋ねる手がかりもやと、詮議のあてども雲をつかむ、雲雀毛に打跨り、清重をちらと見付け、悪い所の出合頭、駒の頭もうなだれて、知らぬ顔に乗過ぐる、見ぬ顔させぬと駿河次郎、向うにすつくと立ちはだかり、「ヤア珍らしや梶原、汝上洛せば、早速主人の御館へ参るべきに、面出しもせず、洛中は主君の膝元、馬の蹄にかけ乗打するは、フム合點合點、平家亡びてより、鎌倉殿と御兄弟御中睦じからず、汝親子が讒言にて、討手に來たるに違はぬく。サア堀川の御所へ参つて、有の儘に白狀せよ」と詰掛けられ、返答ぎちとつまりしが、弱身を見せじとからくくと嘲り笑ひ、「景高は大名、左様の禮儀をしるまいと思ふか、此度鎌倉殿より御不審の條々、一々承つて上洛したる梶原は御上使、汝等風情が乗打を咎むるがまづ緩怠、一つには又判官殿、言譯の筋も立ち、御兄弟の御中、御和睦も有る様にと、加茂祇園北野の社に祈誓をかけ、只今参詣する所」と、口から出次第神集め、嘘八百に言廻せば、「サア其御不審

の「イヤ小癪な、汝が聞いて何んと判斷なすべき」と、手綱搔癪り乗出す、尾筒を掴んで、「待てくくく」、言はぬは曲者、何分主君の館へ参れ、異議に及ばず鞍つほに括り付け、引きずつて行く、覺悟せよ」と、二三間引戻し、尻居にどうど投付ければ、梶原馬上に反橋形、「エ、憎き清重、上使に向つて重々の狼藉。それ引くよれ」と、聲に随ひ數多の家來、ばらくと立ちかゝるを、駿河次郎、得たりや應と取つては投退け、掴んでは打付け付け、梶原目がけ飛んでかゝる。こはかなはじと一鞭あて、一散にかけ行けば、家來もはふはふ逃げちつたり。何國までも遁さじと追ひかけしが、「いやくくく」、一先主君に申上げ、思へば憎い梶原め」と、駈出しては立戻り、「よし、生けて歸すも千人供養」と、心一つでとつおいつ、思案の底を堀川の、御所をさしてぞ三重歸りける。都の出口来て見れば、愛宕参りや伊勢参宮、引きもちぎらぬ往還も、夜は旅行の跡絶えて、人音まれに粟田口、木々の梢も若草も、名残の霜に照添ひて、姥が懷物淒く、星の光も曇る夜の、黑白なき道をのつさく、歩み來るは天津の町、古き老舗の店を張り、みよすも通る名も通る、往來もとうて池の端、針右衛門とて遠目にも、光る鬘付頭がち、強い事好く腕自慢、覺もなりより力より、心ばかりの浮氣者、京の得意を駈廻り、日暮れて歸る道の邊の、側へに積みたる稻村より、「ヤイ待て待

て」と強請の胴聲、聞いて愉り飛退きしが、「ム、合點々々、爰は名代の姥が懷、狐狸のわざでも有るまい、剥奴等に極つた。望む所」とずつと寄り、「大津八町に隠れぬない、池の端の針右衛門知らぬかい。待てと吐すは何奴ぢや」「オ、針右衛門聞及んだ、おりや見えた通の稻村」「ヤ此奴滅相な、橙子が物言うたは見世物に有つたれど、稻村が口利いた例がない。馬鹿つくさずと、用が有らば出さつて吐かせ」「オ、出なというても頼見にや置かぬ」と、によつと出でたる大男、力士の如く突立てば、ぎよつとせしが怯まぬ顔、「コリヤヤイ、われが用は聞くに及ばぬ、酒手で有らうが、温かに此男、鼻紙一枚やりやせぬはい。退いて通せば其方の仕合、悪う働きたてすると、身内が鐵の針右衛門、くつしやくしや突いてくりよ」と、力みかよれど見向もせず、「ハテ姦しい、願ふかずときりく脱げやい」「ヤア何ぢや脱げ、ハ、ハ、ハ、ハ、此奴こりや寐とほけたか、相撲ぢやないぞよ。裸にしたくば、腕先でならばさあ取れ、サア剥け」と、身構しても動かばこそ、「ヤアをさめ過ぎた盜賊奴、此ぶつぶとふきでる力、此方から見せ付けん」と、胸づくしをしつかと捉り、「何と嚴いか、どうも得せまい、所をすつと斯う差込み、引つ擔いで、コリヤ可かぬは、めんよう、常は能ういくが、さあと言ふと場うてがする、ム、其筈勝手が違うた。今度は斯う取る、うんと、是でもやられぬ、やられぬ物は乞食

の惡口、相手に成つて入らぬ物、赦してこまそ」と、退いて見てもむしやくり腹、思へば無念
 と又取付く、腕もぎはなし、素首弱腰引摺んで、深田の中へどうど投ぐれば、「あいたたよ、さ
 つてもひどい、コリヤ酷い」と、身内を撫でて「南無三寶、今の拍子に財布を落した、ア、儘
 よ、其處等に有つても呉しやせまい。エ、こんな事なら、構はなんだが勝ちやもの、力だてし
 て錢出して、痛い目するは盗人におひ、されど布子は助かつた」と、はふく逃けて歸りける。
 財布取上げ「是は拐、足りにもならぬ目腐錢、無駄骨折つた」と呟く向へ、「来るはく、此奴
 は慥に實の有る奴、遁しはせぬ」と咽づんばい、先はそれとも知らねども、心から吹く臆病風、
 ぶうく者はをらぬかと、こはさ紛らす高念佛、「なまいだ、なむあみだいやほう」ほうど出く
 はせ、「コリヤ遣らぬは、其懷な物置いて往け」と、聲かけられて、「ア、恐はく、持合が
 ありや如才はない、いかなく一錢も」「ヤ無いとは言はさぬ、とほけまい。體に似合はぬ奴が
 足音、重い輕いで、有る無いは目をかけた程知つて居る。錢も有らう、金もしつかり持つてを
 ろ」と、星をさよれて、「コリヤ奇妙、ア、目高に逢うててめはならぬ。我等は三條釜の座の、
 金四郎といふきん五好、夕べ大津で引つかけたりや、勝つ程にく、板銀一丁錢三貫、汗水流
 して取つた物を、又物せうとはそりや胴慾、今夜の所は圍うて貰ほ、重ねて進ぜるしびんも有

らう、了簡なされ」と、言捨てゝ辻けんとす。「どつこい遣らぬ」と飛びかゝり、肩先掴んで引けひよろく、「ア、こりや如何ぢや、引戻すはあざきりか」「ヤア動くな、四民をはづれ、野ら遊のほでてんがう、おのれらに金銀持たすは國土の費、とても口先では渡すまい、手短にばらしてくりよ」「ア、其ばらすはきつい禁物、まゝよてんとれ金四郎が不運、唄七里八里は馬でもこすに、越すに越されぬ姥が懷、我らが懷是非がない、どうだいに三つを見た」と、皆捲け出して辻けて行く。爰へいきせきくる男、暗さは暗し氣はいらつ、行當つて、「あいたしこ、御許されて下さりませ、少と急用があれば、氣のせく儘の僮相」「イヤ僮相は赦す」「アイく」「其代に酒手せうはい」「エ、イ」といふより身はわなく。「サア出せ」「アイく」「出さぬか」「アイく」「出しをるまいか」と引捕へ、わつと叫ぶを無理無體、懷探し、「コレく、これ程有る物を、強い奴ちや」とつき飛されてどうど伏し、涙はらく大聲上げ、「テモ扱も情ない、たどさへ術ない暮らしをするに、一人の親が大煩、今をも知らぬ危い命、せめて髭人參でも進ぜたら、取止める事も有らうと、心はせけども、何を如何とのあだてもなく、せん方つきて京の妹が給銀の内、拾ふ借つて貰ひ、一足も早う往んでと、力に思つた甲斐もなう、此様な目に逢うて、すごく戻つて何とせう。見すく親を見殺すは、テモ扱も情ない」と、大地

を叩き身を悶え、只わつくくと、泣くより外の事ぞなき。「ムウ何ぢや、親の大病、人參が吞ませ
 たさに、妹が給分借つたのか」「アイ漸と拾欠、夫れをお前にしてやられて、親父様は死にやり
 ます。悲しい日を見やうより、寧ろ殺して下され」と、歎けば共に涙ぐみ、「ム、身共も煩ふ母一
 人、孝行は同じ事、コリヤ銀戻す、大切な場に成つて、髭位では届くまい、大人參で養生せい」
 と、板銀一丁投出せば、「エ、イ是をわしに下さりますか」「オ、孝行を感じておのれにやる。人
 の親も我親も、大事に思ふは同じ事、親の爲にする追剥、慘い銀は取らぬはい」「エツエ 忝
 い、慈悲深い結構な盗人様、お銀を下さる冥加の爲、せめては布子を脱ぎましよか」と、帶と
 きかよれば、「ヤイ馬鹿め、剥ぐ程なれば銀はやらぬ、隙入らずと早うせて、養生しをれ」とつ
 きやられ、「是はまあ夢ではないか、追剥様に銀貰ふは、命冥加な親父様、人參が切れたらば、
 又剥れに参りましよ」と、銀戴いて歸りけり。「エ、吠えをつたばかりに、板一丁ついもめた」
 と、跡振返ればしろぐと、雪かと思ゆる雪洞綿、引きしめ着なす女の所體、「味いく、眞裸
 にしてこまそ」と、歩みくる先突張つて、「コリヤめろさい、襦袢脱け」といふに驚き、「ア、
 怖は」と、跡へ逃ぐるを引捉へ、顔見合せて、「ヤア女房どもか」「郷右衛門殿か、是は扱、此
 方はまあ如何して爰へ、ム、聞えた、此間毎夜々々出さしやるを、合點がいかぬと思うたが、

能うもく、此様な怖い事」「オ、思付いたも母を助くる營、武士の落目に切取強盜恥にもならず、それゆゑ非道の銀はとらぬが、さう言ふわれや母の病氣の介抱を、隣の塙に誂へて、今まで何處にはひつて居た」「サアわしぢやとて母御の側、常は一寸放れねど、今日は父御の御命日、せめてお墓へ水なと手向きよと、参つた戻に五條の橋、千人供養の所へ往ての」「サアおのれや施行受けにうせたな」「ハテなんのいの、イヤサ夫れ受ける程なりや、此態になつては居ぬはいの。コレそんな事ぢやない、大切な今の事」「ヤ今の事とは」「ハテ彼の相手が違うたはいの」「ヤアそりや如何ぢや」「サレバ、段々譯は有れども長い事、爰で咄すも内が氣遣」「オ、それよ、道々聞かう、サアく來い」と、打ちつれて、歸る夜嵐山嵐、梢木の間もさらさらさつと、吹けば散るてふ身の住家、急ぎてこそは三重越えわぶる、浮世の峠瀬苦しき、大津と京の世渡り道、向脚から出る日の岡に住む浪人有り。南蠻の骨接郷右衛門と名を記し、桐の古木の看板も、琴の音ならで世にひどき、つめかくる療治人、切疵、打撲骨違、或は脚氣願外れ、其それぐの膏藥を、妻は見馴れて習はねど、のべて離れぬ女夫中、人の痛は直せども、夫の老母の御大病、藥も術も盡きはてよ、夫れ故心の痛みには、付けう藥もなかりけり。女房膏藥延べしまひ、奥を覗いて、「申し、御療治人が三三人も待つてござる」「おつと心

得」たち出づる郷右衛門、紙子羽織の大廣袖、金氣はなれし柄廻、内でも不斷大だらを、さすがに武士の浪人と、いはねど見ゆる其風情、「オ、皆待遠にござらう、身共が老母大病今晩もしれず、療治どころぢやなければども、折角わせられたもの見て進ぜう、一番は誰ぢや」「私でござります」「なんと召された」「夜前京からの戻りがけ、松坂の成敗場を通ります時、かねて追剥が出る物騒なと申すに違はず、太山の様な、てうどお前様の様な」「ハテ迷惑な、身は追剥は致さぬぞ」「イヤくお前様とは申さぬ、様な男でちやうどお前様の様な怖い聲で、酒手をよこせと申しました。私も見掛と違うて、腕に覺は有り、今一倍怖い聲で、大津池の端に隠ない針右衛門知らぬかい、剥いだ物が有らば此方へよこせと、いふやいなや剥ぎにかゝる、まつかせと引擔いて、深田の中へ眞逆様に、投込みは込みました、此脚ががつくりというて痛出し、やうく杖に縋つて參りました、療治頼上けます」と、即ち剥いだ其人に、まつかいさまの物語、をかしさこらへて郷右衛門、「夫れはいかいお手柄、どりや疵見て進ぜう」と、脛押しまくりとつくと見、「コリヤ投げた物ぢやない、お身手痛く投げられたな」「アノ夫が見えますか」「投げられたばかりぢやない、剥れたまでが見え申す」「ハテ面目もない、何を隠さう、したよかに投げられました。されども心有る追剥で、財布に遣ひ残した錢ばかり、著物はたすかつた。

いたみさへ癒れば、取られた錢は一精出せばつい戻る。どうぞお慈悲でござります、御療治なされて下さりませ」直しておませう。女房ども、あほすところ、あるまんすを些と混ぜて付けておましやれ。次は誰ぢや」「イヤ私でござります」と、きどく帽子に手綿被せ、願かけて引つくり、日ばかり見せたは何女、親父めく者連れて出で、「私は山科の挽物師、此奴は嫁でござりますが、コレ此様に」と、綿も帽子もかなぐれば、願はづれてぶらくと、翁の面見るやうに、鼻から下の面長さ、「聲が達者で甘い物食はせ過し、願が落ちた、蠅も得追はぬ様に成りをつたと舅の歎、轆轤で骨を削らる様な、御療治頼上げます」と、おろく涙いちらし。「いや左様でない、此名を落架風というて、男女に限らず、仕事するか物を見るか、なんでも有れ氣を盡かすか、或は阿呆氣に欠などすれば得て有る事、此儘で置けば物も得食はず、段々と願が重うは成る痛はする、死なうより外はない、其方は一大事、此方は心安い療治、癒しておませう。女房ども、風呂敷よこしや。エ、残多い、京中の胸膨どもに是が有れば、一かど禮銀してやる物、しほつても瘦親仁、よもや汁はたるまい」と、戯れながら風呂敷すつほり打被せて、頭抑へて願を、いらふ手品の一はずみ、「サアかゝつたは」と風呂敷とれば、嫁は會釋手をつかへ、「扱もく有りがたい」「コレ物言ふまい、二三日もあしらはねば、又はづれるし。

薬に及ばぬ、退いたく。次は見しつた、六地藏の捨鞭の三藏ぢやないか、なんとした」「ア
一旦那殿、あたほつこしもない、さきをとよひ、鎌倉行の二十三貫有る荷を付替るとて、此
腕がほつきりというてから、痛んてから、かどまいでから、此様に膨が来てから」「もう好い
は、からくいふな、診てとらせう爰へ来い。ホ、ウ、したりなコリヤ大事、肘の骨が齧齧う
た、嘔痛う。悪うすれば死ぬれども、南蠻の骨接、郷右衛門が祕密の療治、立所に癒してやら
う。女房、細引もつておぢや。オ、好い時見せて仕合者」と、痛む腕を引きよせて、柱にしつ
かと括付け、羽織り脱ぎ身輕に成り、手水鉢にさしかゝり、ずばと抜いたる大刀物、水さらく
と汲みかけく、鼻の先を閃めかせば、見るに生きたる心もなく、「申しく、夫で如何なされ
ます」「腕打放して繼ぎ直すはい」「なう悲しや」と大聲上げ、エ、くくくと男泣き馬鹿なしや
ツつら、吠ゆれば癒るか、今切放して接ぎ直せば、本の如く役に立つ、捨置けば次第々々に腫上つ
て、終には一命を果す基と成る。切放す間は一思、役に立つは身一生、人も聞く、吠えまいく」
「でも慘たらしい」「慘うなければ療治にかゝらぬ、サア今切るぞ」と振上げて、てうど切る眞似
おつと飲む、呼吸のはすみ引く拍子、腕の番がつくりと、「もう好い、違うた骨がとつくとは
まつた、最早痛が止まうがな」「ほんに止んだは、スリヤ切り放しはなされぬか」「ハレやうたい

もなく、耆婆や華駝がわけても、切放して何と接がるゝ物ぞ、臆病を見込みて身を引く拍子、手をさへずに本復させる、是が南蠻祕密の療治、此膏藥で膨も減る、何と奇妙な療治か」と、聞いて皆々憐れし、「扱も頓智、御發明、頓ての内に天下道具、怪我せうならば今の内、神か佛か長居は恐、是々腕が動きます、足が自由に成りまする、ハア有難い、忝い、サアお暇」と女房の側、面々謝禮差置いて、悦び打連れ歸りける。夫は奥を窺ひ見て、女房を小隅へ招き、「母も未だお目が寤めぬ。此間に夕べ道すがら咄した事を、今一度聞きたい。彌夫れが治定で、義經殿がお討ちやらねば、親の敵は外に有る。嬉しや義經殿と違うて、討つに義理も遠慮も要らねば、その敵誰ぢやといふ、夢程も心當がない、雲に汁が出来た様で、又雲をつかむ様で、分別に能はぬ。萬に一つ、聞いた内、手掛に成りさうな事はなかりしか、今一度語れ」と念入れば、「サアさう存じて段々念を入れたれば、駿河殿も繰返し、帳面の御吟味、何月、幾日の夜幾人、何の物著て、幾歳ばかりで、如何で斯様でと、小袖の模様年恰好、刀脇指の拵まで明白な帳面、都合九百九十九人は、其所縁の衆が皆施行戴いて歸り、千人目は武藏殿で、帳面さらりと打濟み、微塵も胡亂な事もなく、手がかりに成る筋は猶なし。おいとしや、誰が殺して千人斬の内へつきませ、科ない義經様を疑はせ、大事のお前は埋らせ、是までさへ有る物

を、此上の心づかひ、御苦勞なさるが悲しい」と、涙催す折からに、表に人數多足音して、乗物昇きする立出づる其行粧、頭は薙髪の大男、足利様の長羽織、平柄の刀提け立出で、「頼入らん」と案内請ふ。女房立出で、「何方ぞや」と答ふれば、「南蠻の骨接、郷右衛門といふは此家とな、在宿ならば御意得たし」「ハ、何方か、幸ひ宿にをりまする」「然らば罷通らん」と、しづくと奥に入り、「未だ不知案内御免有れ、郷右衛門とは和殿よな、仔細有つて我名は申さぬ、骨接金瘡の療治御巧者と承つて推參致す、頼入りたし」とありければ、「功者とお聞きなされし上は、下手と申すも諛がまし。某が癖として、名も處も聞かいでも、お頼なれば療治致す。シテ其お痛みは」「療治してくれめされうか、忝い」と、弓手の片肌押脱いで、疵さし向ければ立寄りて、包みし袱紗物解きほどき、とつくと見、「ムウ疵口は僅なれども、鈍骨に當つて、しかも手の内定らぬ鈍刀疵、是は嘸お痛みなされうが、療治致さば早速御平癒。女房膏藥箱持つて来い。ホウ肩先にも古疵の痕、こちらの切口とは違うて、オ、天晴な刀の痕、此時は嘸御難儀、御人體に似合はぬ、さいく斬られさつしやるの」「さればく、其疵は十三年以前、身も未だ浪人の時で、養生に迷惑いたしたさ」「何として又切られさつしやる、浪人の時ならば、辻切追剥でもなされての事かい」「イヤ左様でない」「さうでなくば押

入か強盜か、如何で碌な事では有るまい」「ハテ迷惑な、さう問はれては、語らずばかなふま
いものでおぢやる。此疵は十三年以前、其比は平家の世盛、身が譜代の御主人は、仔細有つて
東國に漂泊の御身、京都の便を頼はんと、某一人都へ上る、比は三月初めつた、地主權現
の花盛、太政入道の次男平の宗盛、湯谷といふ女を俱して終日の花見の歸、是ぞ能き折節、見
参せんと、六波羅密寺の小藪の蔭、立忍ばんとすれば人有つて、狼藉なり、何者といふ。木に
も萱にも心置く身の悲しさは、平家より付置く忍の番と心得て、返答もせず拔打にてうと斬る。
彼奴もさる者、心得たりと抜き合せ、したゝかに切付けしは此疵痕、されども難なく切殺し、
見れば六十餘りの老人、側に弓と矢有り。扱此人も源氏の餘類、宗盛の歸りを窮ふ我同腹中
と、跡で心は付きたれども詮方なく、早追々に警固の提灯星の如く、見付けられては事むづか
しと、死骸を引提げ、程近き五條の橋に捨置きしは、其比如何なる者やらん、五條の橋にて千
人斬、跡で聞けば、義經公千人斬の十三年、追善供養なされしとや。夫とはしらず、其仕業に
せん物と、一時の計略、今源氏一統の世となつて、恐るゝ方はなければども、好事すら無きには
如かじ、必々他言は無用」「何が扱人には語るまい、して其時の御假名は」「澁谷金丸昌俊、
今は澁谷土佐坊昌俊」「親の敵遁さぬ」と、ずばと抜いて打ちかくる。飛びしさつて拔合せ、

はつしと受け、「コリヤ早まるな、扱は只今物語りし老人が忤よな」「おんでもない事」「さも有らん、せかすとも名を名乗れ、いかにく」「義經公の御内に然る者有りと呼ばれたる伊勢三郎義盛、千人斬につきませし其老人は、我父伊勢の左衛門俊盛、親の敵遁さぬはい」「どつこい先待て、其伊勢三郎は義經公の股肱の臣、何故に此有様、それ聞きたい」「オ、汝が今の物語、父を討つたる其時、我は駿州にさすらひ、都に残せし此妻が方より知らせに驚き、早速都へかけ上つたれども、千人斬も早事濟んで、誰を敵と討つべき様なく、又本國へ下つて無念の年月を送る所に、不思議に義經公の家臣と成つて、西海四海の戦ひにも、影身を離れぬ我なりしが、五條の橋の千人斬は我なりしと、去春初めて御物語、討てば主、討たねば親への孝立たず、奉公は猶ならず、母を養ひころしての、跡は浮世を捨坊主と、合點して暇を取り、其の上盜賊せし時に習覚えし此營み、昨日敵は外に有りと、女房がつきませの譯を聞出しても其名を知らず、再び心をくるしむる所に、思はぬ今日の對面は、親人が是討てと、手を取つて連れてお出でなされたか、ハア、忝い有難い。優曇華は拜んで折る、親の敵は拜み打、立上れ、サア參らう」と詰めかけたり。「待て、早まるな言ふ事有り。ヤア家來ども尾籠千萬、何を立騒ぐ、此家を遠ざけて歸るを待て、往けく。扱々、承つて御心中察し入る。いかにも爰は

お相手に成り、御本意遂げさせたい物なれども、あつといはれぬ其仔細、物語る内先刀を引かれよ。今度鎌倉より義經公へ二ヶ條の御不審、平家一味の連判狀と、京の君の首取つて來れと、梶原平次景高を都へ上さる、彼梶原父子逆櫓の遺恨によつて、義經の御事様々に讒言すれば、都へ上り如何様に事を破り、御兄弟の中惡しく、御身のひしに成つてはと思ひ、鎌倉殿の御前にて一通の起請文を書き、梶原と一所に此地へ赴く、案にたがはず堀川の御所へ忍びを入れ、彼連判狀を盗取り、義經の誤りにせんとたくむ、扱こそと某姿をかへ忍び寄り、念なう其連判は梶原が手より奪ひ取り、密に義經公へ渡さんと折を待つ、是此の疵は其時の疵、梶原と一所に住む居形の内、療治の取沙汰聞えては、返答むづかしく、御邊が名を聞いて、是まで療治を頼みに來たり、思ひもよらぬ對面、我こそ親の敵よと、名乗つて討たるよは安けれども、爰を能く聞かれよ、今御邊に本意をとけさせ討たれては、誰が残つて義經の御身の上、事なき様に取はからひ、鎌倉殿とも御仲よく、梶原を鎌倉へは歸すべき。かく親の敵の顯はるゝ上からは、御邊も義經公に恨みなく、主従の禮儀よもや忘るまじ。梶原を鎌倉へ返すまで了簡し、此敵討を延べて給はれば、某が初一念も立ち、義經の御身も立つ、聞分けてたべ三郎殿」と、低頭平身手をつかへ、涙をながさぬばかりなり。「ヤア聞分けぬく、知らぬ中

は是非もなし、知つては半時も同じ天は戴かれぬ、サア勝負々々」「夫は曲もない、所存の本意を達せんと思はゞ、返り討ちに討つ事も有るべきか、夫れは道ならず。なう御内所、仔細は聞きなさるゝ通り、歩に首を提けられ、鎧をかたにかけぬ法も有れ、偽りなし、梶原を返すまでの宥免、お取なし頼入る」「何が扱、人にこそよれ昌俊様、其處に偽りは有るまい。三郎殿、申しく」といへども聞入れず。「いやくくく、女の知つた事ではない、だまつて居よ。

コリヤ昌俊、返り討ちに討たれうが討たれまいが、それや互に時の運、裏釘かへすな一寸も待たぬ、此座は立たせぬ、サア立上れ」といぢばる聲、「三郎待て、義盛までやい」と、母は寢處を立出でて、嫁を杖とも柱とも、引かれ纏はれ二人が中、ヤアエイと座をしめて、苦しき息をつぎあへず、「つれあひを討たしやつた昌俊殿は此方か、オ、健な能い器量や、義經様を御大切に思つて、上京さつしやれた咄聞きました、いかい御苦勞、サア緩りとなされ。コリヤ義盛、餘り物が了簡過ぎる、夫では思はぬ間違が有る物と、日頃叱つたそなたが、昌俊のわけでお申しやる段々の斷、今日に限つて何故聞入れぬ。但しは生死不定の世界、日を延べて其内に死にやつてはと思つてか、夫は人による、梶原が都の逗留も、長うて百日か百五十日、昌俊の命、それまでは母が受合ふ、了簡して先往なしましやいの」「ハア、畏つたと申上げたいが、

是ばかりは御赦されう。昌俊が命は五年三年延べても、ちつとも氣遣ひござらぬとも、結句
お受合なさるゝお前のお命、明日も知れぬ御大病、其病の起りはと申せは、此奴が親父様を殺
した故、十三年の御歎き物思ひ、又某此方より暇を取つて浪人し、世の諺にも、老の入りまい
とこそいふに、餘命なき御身に貧苦をさせましたも、此奴が千人斬の中へつきませた故、勿體
なや、咎ない義經公を討たれぬ敵と、くいゝ思召されたおどもりが、つもりつもつて此度の
御大病、すりや親父様ばかりぢやない、お前を煩はせるも此奴が業、一方ならぬ憎さゝ。年
來の濃霧を散する今日只今、首取つて莞爾のお笑ひ顔が見たさに了簡は得致さぬ。女房奥へお
供申せ。サア昌俊立つたゝ、了簡ない」と裾端折つて身繕ひ。母「コリヤやいゝ、今昌俊
を討てば、父の供養、母へも孝行にはならぬぞよ」「とはゝ如何に」と褰けを下ろし、驚き側
へすり寄れば、母「父親は宗盛を一矢射んと忍び出でて、再び返らぬ昔語、かねゝ母がいうた
と、昌俊殿の物語違うたか。討つた此人も、討たれた父御前も、同じ源氏の爲を思うて味方
打、親に掛換への有る物なら、此敵は討たいでも、人が卑怯者とはよも言ふまいと思へども、
其處は女の智慧に及ばぬ。今討つて父の供養、母へ孝行にならぬといふ譯はな、まそつと先ま
で、義經公を親の敵と思ひつゝも得討たなんだは、三代相傳のお主故ではなかりしか。其お主

に鎌倉より御不審かより、一大事の今此時、立歸つて御用に立たうと思ふ所存はなく、結句お爲に成る昌俊殿を殺して、梶原めが思ふまゝに、義經公を取りつぶさせて仕廻うたら、嘸冥土の父御前が出来したとお譽めなされうぞ。武士は町人百姓とちがうて、なんほ親に孝行でも、忠義と武勇を忘れては、弦なき弓も同じ事。恥しや昌俊殿、君の爲に我を忘れ、頭を下へ手をついて段々の斷、敵同志は猶恥有る物、義理を忘れて、何ぢや、此座を立たせぬ、オ、見事な武士道、此上は留めぬぞ。サア討て、振上ぐる刀の下、母が先へ死んで見せうぞ。エ、悲しや、其心では一生其身で埋もれ、伊勢の名字も是限り、是を思へば昨日にも死したらば、此憂きめは見まい物、ながらへて憂き命や」と、我身を啣ち子を恨み、かつぱと伏して泣きさけぶ。三郎大きに身を悔み、「御存生の内、敵の首お目にかけたいと思ふ一途に、主君を忘れし誤、眞平御免下さるべし」と妻諸共、五體を投伏し詫言し、「ナウ土佐坊殿、仔細はお聞きなされと通、母の心を休むる爲、梶原が鎌倉へ歸るまで、此方は敵討を延す所存、貴殿も愈延べて欲しき御所存か、何とく」「是はく、忝い、必定延べて下されうか」「おんでもない事」「ハア祝著仕る。是と申すも老母のお情、お禮の申様は、夫よく、幸の物こそ有れ」と懷中より、錦に包む一軸を取出し、是こそ梶原が手より奪取りし、平家一味の連判狀、是を老母に

進上申す」と、手に渡せば押したとき、「あつばれ是は何よりの賜物、我子が奉公歸參の願ひ、義經公への土産物、此上の有るべきか。斯ばかり心有る昌俊殿、申すには及ばねど、我君の御事を、くれぐれ頼み参らする。敵討の儀は格別、夫までは義盛昌俊殿と中好うして、君への忠義を忘るゝな。命有らば又お目に、かゝる所に長居して、人の疑ひ受給ふな。歸らせ給へ昌俊殿」「實に能く心付けられたり」と突立上り、「伊勢三郎義盛と、澁谷土佐坊昌俊が契約金石の如く、預の大事の我命、只今持つて歸り申す。さらばく」「さらばく」と立出づれば、義盛も突立ち上り、「天に不時の風雲有り、人に不時の煩ひ有り。病氣ならば養生加へ、早速に知らされよ」「何が扱何がさて、御邊より預る命、我身に換へて疎略はない。随分健固に勝負せん」「オ、嬉しと頼もしと、さらば」「さらば」と立別ると、鎌倉の義者都の勇者、東よ京よ娑婆冥土、「なう母様の御臨終」と言ふ聲に、立寄る甲斐もなき佛、わつとさけべど歎けども、歸らぬ死出の片便り、情は情仇は仇、見るにたへかね忍びかね、こほるゝ涙押つゝみ、南無阿彌陀佛彌陀佛と、心でいふも誓願力、長き闇路や三重照すらん。

第三

風の勢は大海の浪を動せども、井の内の水を動す事能はず。九郎判官義經公、梶原父子が讒言にて、御舍兄右大將家の御不審日々に彌増し、京鎌倉と隔たつて、親々矛盾の折からに、北の御方京の君、はや五月の御懷妊、御腹帶の御祝儀も、外様の聞えを憚りて、御譜代昵近の面々ばかり、思ひくに出仕あり、めでたき例を取結ぶ、帶の祝ひぞ賑はしき。お次の間より女中の聲、京の君の御乳人、侍従太郎森國が妻の花の井、柄檔姿しとやかに、列座をおめず打通り、御前に手をつかへ、「サテ我君様へ申上げます、今日の御祝儀、幾千代かけて末ながき、お腹帶の儀式も相濟み、京の君様にもお里にて、それはく事ないお悦び、御乳人の役なれば、夫侍従太郎参らるゝ筈なれども、今鎌倉より意地惡の梶原が上洛して、有る事無い事、かはい男へ忍び妻が、日文を書いてやる様に、頼朝様へ知らするけな。夫故に目立たぬ様に、私が参上いたしました」と披露する。「オ、さも有りなんく、此義經、梶原づれを恐るゝには有らねども、鎌倉殿を敬ひ補ふ心より、今日の壽もひそかにと言ひ付けたりと宣へば、「夫に付き、此おめでたを幸に、京の君様のお願ひは、去年の春より行方のしれぬ、伊勢三郎義盛殿の事、

誤りを御赦免有り、元の通御家來となし下されかし。此間毎日々々お里へ来て、お詫びなされて給はれと、あの一人當千な侍の、身すほらしいを見る目も氣の毒、いとしさにお次まで同道致しました。お腹帯の祝ひに持ちかけ、伊勢殿の歸參の願は大きな吉左右、伊勢の二字を偏と傍を引きわくれば、人平に生まるは丸が力とよむと有れば、當る十月にするくくと御平産の瑞相」と、色も香も有る花の井が、言葉に花を咲かせける。判官始終を聞給ひ、やゝ默然としておはせしが、「傳へ聞く伯夷叔齊は、其罪を憎み其人をにくまずと言へり、すけなく追ひかへすも物の哀を知らぬに似たり。殊に武盛といひし比より、一方ならぬよしみの者、先々是へ呼出せ」とありければ、花の井額を疊に付け、「有りがたい御仁心、使のきほも立所に、御對面有らんと有る、サアく是へ」と、知らずに程なく立出づる、伊勢の三郎義盛が、主の威光に、跣り、身に鱧もなき鮫小紋、麻上下に垢づきし、縋袍布子も打しほたれ、携へ持てる一つの箱、案上にする置き、遙下つて平伏す。「オ、珍らしや義盛、汝主に暇を乞はず逐電して、一旦見限りし義經を、又候や慕ひ來る、所存如何に」と宣へば、伊勢の三郎承り、「恐有る申開きなれども、君牛若の御曹司たりし時、五條の橋にて千人斬の刻、我父伊勢の左衛門俊盛といつし者を、御手にかけれしを鬱憤に思ひ込み、恨を晴さんとすれば、三代相恩の主殺

の罪に落ちる。所詮討たれぬ敵討とあきらめ、俱不戴天の父が仇を忘るよからは、武士を立てても益なしと身退き、縊れても死なんす命を、老いたりし母が爲とながらへ有しは、弓矢神の控へ綱、此程誠の親の敵に廻り逢ひ、敵にてなき御主人を、暫しと疎みし天罰の勿體なさ、身にしみぐと思ひ知り、御詫願ひ奉る」と、涙にくれぐ言上す。花の井も取繕ひ、「何かはしら木の此箱入、歸り新參の手柄始めに獻上」と、御座近く差出せば、御手づから蓋押開き、一卷を御覽有るより御氣色變り、「ヤア是こそ詮議する平家の廻文、我館へ忍入り、盗み取し曲者は、扱は三郎おのれよな」と、思ひがけなき咎に義盛、「コハ情なき御疑ひ、其廻文某が手に入りし仔細、他聞を憚る密事なれば、最前御式臺にて武藏坊辨慶に、密に語置き候ふ、追つて御聞き下さるべし」「イヤ猛々しき偽り、誰か有る、アレ引立てよ」と御詫の下、西塔の武藏坊辨慶、梨打烏帽子引立て、輪棒摺つたる大紋の、袖まくりにて御廣間の大火鉢を携へ、しづしづと御前に出で、「コハ仰々しい御憤、先刻廻文持參仕ると、此御疑ひ有らんと存じ、彼が面晴れの用意致し候ふ。コレく義盛、古の高良の臣は、湯起請を取つて君の御疑ひをはらしたる例も有り、御目通りにて鐵火を握り、身の申譯立てられよ」と、火鉢に燻べたる鴈股の大矢一本、鏃を火焰に焼立てよ、飛びちる火花を打ちはらひ、指出せばいさぎよく、「伊勢三

郎義盛が、平家の廻文盗みとらざる正直心、是御覽ぜよ」と、既に焔鐵手に取る所を、「ヤレ待て辨慶、早まるな義盛、疑ひ晴れて元の如く、主従なるぞ」と宣ふ聲に、二人は夢の覺めたる心地、ハ、ハット飛びしさり、悦び勇む折こそあれ、當番の奏者罷出で、「鎌倉の御上使、梶原澁谷同道にて、只今是へ」と申上ぐれば、大將暫く御思案有り、「ヤア伊勢の三郎、察する所、此廻文渡せと有る催促ならん、其時に汝心得持參せよ、先夫までは休息すべし」と君の御機嫌、義盛はつと領承し、伺候の人々諸共に、御前を立てば花の井嬉しく、「此様子を京の君様へお咄も申したし、蚰蜒と鷹には、逢はぬがとくくお暇」と、お里をさして立歸る。鎌倉の上使梶原平次景高、澁谷土佐坊昌俊を伴ひ入り來れば、禮儀正しく義經公、辨慶諸共出向ひ、「上使と有れば方々は、鎌倉殿も同然」と、上段の間へ進めやり、御身は席を下り給ひ、饗應殊にこまやかなり。梶原平次會釋もなく、「先達て仰越されし二箇條の御不審、日逝き月來れども、便と御申開き無きによつて、右大將家以ての外の御怒、急ぎ北の方京の君の御首討つて、廻文に相添へ渡されよとの御説意なり」と、苦々しく相述べれば、物に騒がぬ御大將、謹しんで聞召され、「去る比腰越にて、神文まで指上けしに、御疑ひ晴れざるによつて、暫く時節を見合せ、申開きを立てんと思ふ所に、存じの外の説意、追つて返答申上けん」と、仰もあへぬに澁谷

の昌俊、「イヤ此上に御返答延引致さば、由々しき御大事、指を數へて近きに有り。右二箇條の御不審、今日中に申開き有るべし。了簡強い梶原はとも有れ、某は用捨仕らぬ」と、口にはつれなく心には、我手より渡し置きたる廻文にて、申開きを立て給へと、言はぬばかりに言ひ廻す。「ヤア此景高を了簡強いとは、熟柿を笑ふ澁谷の言分、手緩しく。説意を守り京の君の首討たうとの仰なければ、此通を鎌倉へ申遣す分の事」とずんど立つを、末座にひかへし武藏坊、「ア、暫くお待ち下されよ」と、押沈めたる其所へ、伊勢三郎義盛、華麗に装束改め、廻文の一卷をうやくしく臺にすゑ、御前に直せば、判官座上に移らせ給ひ、「ヤア梶原、上使の一通り相濟んだれば、あれへ下つて、平家へ一味したる者どもの、名を一々に読み立てよ」と宣へば、「鎌倉殿の上覧にさへ供へられぬ廻文を、拙者に」「イヤサ讀めといふには仔細が有る、早疾く疾く」と仰に景高立寄つて、連判狀の紐解き開き、「コリヤ如何ぢや、口の文言、我等が寺にはすつきり無い字、年號月日も知れた事」と、繰り明けく、「東國八平氏の旗頭大場の平太景信、同次郎景兼、古郡の左衛門保忠」と讀みさしてぎつちり詰れば、「シテ其次の名は」「サアそれは」「サアなんと」と、問詰められてうろたへ廻れば、判官こらへず廻文もぎ取り、「去ぬる一の谷の合戦の時、某に不覺をとらせんと、おのれ一家が勧めにて、平家へうらがへつたる侍幾許

ぞや。いやといはせぬ證據は是見よ、自筆にて梶原平三景時、同源太景季、同平次景高と、親子三人の血判有る。かゝる舊惡を隠さんが爲に、説意ごかしに此廻文、奪取らんとは、ふてぐしき工よな。此外の連名讀むに及ばず」と一つに丸め、前なる火鉢へ打込み給へば、折ふし誘ふ山風に、焰々として連判は、忽尉と成りにける。せきにせいたる義盛辨慶、詞を揃へ、「鎌倉殿へ御申開きの種とも成るべき一卷を、焼捨て給ひしは訝しき御賢慮」と、憚なく申すにぞ、「オ、驚くは理、問ふまでもなし、我心腹を明さん、昌俊是へ」と近く召され、「只今焼捨てし廻文の事は、疾くにも鎌倉へ渡すべきを、某が手に留め置きしは、全く舅時忠をいたはるに非ず。今源氏に隨ふ東國の大小名の中にも、連判したる輩少からず。事治りし上なれば、御咎なきにもせよ、廻文御手に入りしと聞かば、身に覺え有る者どもは、自然と心隔り、終には鎌倉の騒動とならん。鎌倉の騒動は天下の大事、其處を思つて焼捨てたり。是も我誤にならばなれ、天下の爲兄の爲、是程迄に思ふ弟を、佞人讒者の偽にまどはされて、兄ながらも鎌倉殿のつれなき御所存、誠に他人の始りとは、能くも譬へし世の諺、今義經が身の上に、ひしと思ひ當りし」と、猛く勇める御目の内、涙うづまくばかりなり。切なる君の御悔み、思ひやつて伊勢武藏、感涙催し土佐坊も、とかう答へもなかりける。梶原は減らず口、「某親子は平家を欺く智略の連判、誠

に一味した者の爲には、結構なお情」と、ひやうまづけば氣早き大將、ぐつと焦き立ち、御佩刀に手をかけ給へば、辨慶中につけ隔たり、「ア、御短慮なる御振舞、梶原に御遺恨は私事、鎌倉への御返答、苦しからずば御免を蒙り、某宜しく仕らん。君には先々御座の間へ、いざさせ給へ」と諫むれば、尤とや思しけん、「オ、忠臣は危きに顯るゝ、汝が振舞、主の難儀を身に引受けん」と、健けなる心ざし、然らば我になりかはり、萬事よきに計らふべし。義盛來れ」と引連れて、帳臺深く入給へば、梶原平次笑壺に入り、「サア辨慶、焼いた廻文は是非もなし、其代には明日とも言はせぬ、京の君の首討つて渡されよ」と、又ねぢかゝれば、「イヤサ、先達て時忠卿を能登國へ流されし上は、最早京の君にはおかまひない筈」と、いはせも果てず、「ヤア其言譯暗いゝ、平家方の娘を具せらるゝからは、鎌倉へ對して謀叛といはんに、ぬきさし成るまい。京の君の首討つて申しひらき有るか、但し判官殿に痛い腹切らせるか、二つ一つ、手短い返事承らん」と、詰寄せゝ、遁れぬ手詰ぞ是非もなし。辨慶は拳を握り、思案にくれて居たりしが、「ハ、ア夫よ、愚夫顛倒迷之と聞く時は、善も惡も迷ひの前、北の方の御首討つは、不忠に似て主君を助くる大忠臣、いかにも寔意の趣、相心得候ふ」と述べければ、「オ、其筈々々、流石天台坊主程有つて、尤な氣の付け所、然らば今日八つの鐘を相圖に、め

ろさいが死にしやツたら、梶原が受取りに参るべし、罷歸る」と突立てば、昌俊もつゞいて立ち、「必々京の君に犬死させぬ工夫が大事、合點か」と、善惡二人が詞詰、獨の心に取納め、辨「氣遣有るな」景北の方の御首必ず討てよ」辨念にや及ぶ」と、目禮するも睨み合、反打ちかくれば眞中に、義有る土佐坊、倭有る梶原、忠有る武藏ばう然と、立別れてこそ三重行空の、天さかる、鄙にはあらぬ京の君、雲井を出でて何時しかに、義經の北の御方と、なれて榮え有る武家の妻、殊更に御懷胎、御腹帶の御祝儀も相濟み、お上屋敷は公の事繁く、お心にさはる事もやと、御乳人侍従太郎が館に、暫し假居の先々まで、公家武家方の見舞の使者、門前市をなしにける。爰にお腰元信夫が母親、おわさといふお物縫、御機嫌伺ひとて來りける。侍従太郎が妻の花の井女房達、「能くぞく上られし、今日はことなうおさもじさう故、誰をがなお伽にと思ひしに、嬉しやく、いざ」とてお前へ連れ出づる。「珍らしや、此程は何として見えざるぞ、定めて四方の紅葉見に、彼方此方と、嘸面白き事ばかり、浦山しや」と宣へば、「御意の通、高尾柵の尾嵐山、わけて今年は稻荷山の薄紅葉が、いつくよりも見事な事と世上の噂、ほんにく針のみとずで聞けばかり、あなたからは早う來い、此方からは疾う來いと、参るもく紅葉見の、お晴小袖の仕立物、夜を晝に京田舎が打ちまじつて、夫はく賑やかな

秋でござりますすけな。是と申すも、義經様が京にござなさるゝ故ぢやと申すを聞けば、弓も引きがた判官様最眞、嬉しいやらめでたいやら、お悦びにあがりた、今日よ明日よと思ふ内、娘が方から帶のお祝ひもすんだ、何故お悦びに参らぬと、叱つておこした文をろくに見るや見ず、何が捨置き取りあへぬお悦び、何ぞ上げたいと思へど、結構な物はあなたに有り餘る、せめて是を」と差出す、袂の内の袱紗物、「是は海馬と申して、文字には海の馬とやら書くけな、めんよう希代の御産の呪ひ、私が曾祖母が十九人、祖母はおとつて十三人、母から私が手に傳へ、あの信夫を産むまでに、一度も不覺の産をせず、満足に産みならべた、腹覚えの有る捧け物、追付御産の月満ちて、此海馬にひらりとめし、檢非違使五位尉、源の義經様の若君我なりと、大手の門をさつと開き、やすくと御誕生、おめでたや、へ、へ、へ、へ、ホ、ホ、ホ、ハアしんどや」と饒舌りける。「ほんにつべこべくと長口上、息がはずむ、娘お茶一つくんでたもと、申せば君もをかしさの、「氣輕にわさくと物いやる、おわさとは能う付きやつた」と、袖打ちおほひ給ひける。かゝる所へ奥使の女中、「申し、花の井様、君よりのお使に、辨慶様がお出でなり」と、申上ぐれば女房達、「サア、女嫌ひの武藏殿が見えたといの、濡れかけて嫌がらせ、お慰みにせまいか」宜かるくと立騒ぐ。「是々皆の衆、君よりのお使な

れば、いつもとは違ふぞや、必々 黽るまい、先連合を呼んで下され。おわさ女郎、辨慶といふ人見てか、未だなら此處にゐてお逢ひなされ、かんまへて皆の衆、くつく吹きだすまいぞや」と、夫諸共に出向ふ。何時に勝れて武藏坊、へりぬり取つて打かづき、大紋の袴ふみしだしき、しづくと奥に入り、むすど坐して一禮し、「オ、存じたと違うて、御顔色もみづく」と御機嫌の體、先安堵仕る。是と申すも夫婦の衆の御介抱、大切になさるゝ御苦勞の甲斐が見えて、祝著に存するよ」「是はく 忝い御挨拶、御主人ながら御平産有るまでは、此所に預りの京の君、殊に御存じのごとく御母君、娘が平産祈の爲願ひを立て、伊勢參宮の留守の内、彌我々が心遣ひ御推量、義經公の御前幾重にも御執成」「いやく執成に及ばぬ、物事のとりなしといふは、かなれ八合な事を十分に言ふが執成、辨慶はそれ嫌ひ、見た通を罷歸り、眞直に申さば、君も嘿御満足。扱是は御夫婦への咄ではない、後學の爲京の君への御物語。總じて勇士の戦場へ赴く時は、三忘と申して、忘るゝ事三つ有り、國を出づる時家を忘れ、堺を過ぐる時妻子を忘れ、敵陣に臨んで我身を忘るゝ、婦人の懐胎もまつ其如く、一氣腹に舍る所、とりも直さず勇士の國を出づる時、御腹帯をなさるゝ所が、勇士の妻子を忘るゝ所、既に月満ち、すは御産の紐をとかるゝは、勇士の敵陣へかけ入つて、これぞよき

敵ござんなれ、のがすまじと引組んで、首を取るか取らるゝか、好い子をうむか得産まぬ
 か、生きるか死ぬるか生死の界、爰を能う御合點なされ、かねて無き身と思召せば、その期
 にのぞんで不覺をとらぬ、ナウ御夫婦、左様でござらぬか。ヤ我申す事ばかり、肝心關門の
 御内談遅なはる、爰は端近、密に御意得たし。女中方も遠慮めされ、奥へ參らうか」「いざお
 通り、御案内」と、京の君を誘ひ先に立てば、「なう御夫婦、豫てなき身と存せねば、其跡に必
 ず未練が出るではござらぬか」と、鎌倉殿の難題を、つい打明けていへばえを、暫く心おくの
 間に、打つれ伴ひ入りにける。年若けれども利發者、信夫差配し、「ナウ皆様、何事の御内談、
 お隙が入らうも知れまいに、お盃でも出してはの」「それく、マアお烟草盆、お茶持ていくぞ
 や」「宜からうく」「お菓子もついでに頼むぞや」「さらば此間にちよつと母様、此比はお
 顔も見ず、お懷しや」と立寄れば、「和女も息災に有つたの、明け暮れ傍に引きすゑて、見れど
 も厭かぬ一人子を、手離して置く親心、親懷しと思ふより、百千倍とは知らぬかや。假令御前
 の御意に入るとも、必々傍輩衆を袖にすな。陰口告げ口たしなんで、諸事を内端に控目に、出
 かし立てして猜まるゝな。林の中にも高い木は、風が枝をば折るぞとよ。一人寢覺めの度毎に、
 逢はど如何言はう斯ういはうと、溜て置いた數々も、逢へば嬉しうて口へ出ぬ。何を言ふもか

を言ふも身を大事に、煩うてばしたもんな」と、手を取りかはし撫でかはし、心を盡す親と子の、わりなき風情ぞ道理なる。やゝ有つて侍従太郎、奥より出づる屈托顔、おわさ目早く、「是は侍従様、お顔の色悪う、お目の内も潤んで、氣の浮かぬ御容體、御内談といふは何ぞ」「いや〜、氣遣ひの氣の字もない、氣の浮かぬ事微塵もなく、心がしよぎ〜と盆を待ちかねる。ヤ好い次手ぢや、態と往ても逢はうと存じた、幸ひぢや、ちよと物語致さう。別的事でもない物でござる、拙者そもじの息女、此信夫に大執心」「エイ」と親子が興さまし、娘は母の後かけ、小さう成つて身を忍ぶ。「是々、さましてもらふまい、惚れて〜今日は八つまでの内に貰はねば、此方の工面がぐわりりと違ふ。今奥の時計を見たが、九つ過、半時にはまだ成らぬ、秋の日は短い、八つに成るは手間隙入らず、サアおつと言うて貰ひたい。時忠の執權侍従太郎、年に不足もない男、浮氣でない、虚言申さぬ、サア下さるかサア如何ぢや」と、眞面目になれば、けらくと嘲り笑ひ、「ア有難い忝い、深山の斧のこけら屑、誰れ取上ぐる人もなく、徒に埋るゝ我娘を御執心、進ぜましたら何となされます」「ハテ女房にしますはいの」「あの花の井様といふ美しい奥様の有る上に」「いやてや、花の井は隙やつて、信夫を奥様にするはいの。侍冥利愛宕白山、偽ない」といふ後に、立聞く花の井嚇とせき、顔は上氣の爪紅血

筋走り寄り、「なんぢや花の井は隙くれる、何をどうして隙下さる、仔細が有らう。譯聞かねば
 自も武士の娘、ついぐづくと暇はとらぬ、其譯聞かう」「ヤアしやらくさい、昔より女房は
 衣服に譬へ、厭いたれば何時でも脱ぎかへて、外の著物を著るはい。是より外の仔細はない、
 小言いはすと歸れく」「ムウ聞えた、厭かれて添うては面白くない、隙とつた、實正信夫を
 女房に持ちやるの」「くどいく」「持つて見やう」「持つて見せうぞ」「見るぞや」「見せう」と
 我を張つて、負けず劣らず争へば、見かねておわさ押隔て、「呆れて太郎様にはいつそ手が付け
 られぬ、慮外ながらはしたない奥様、假令如何様におつしやるとも、お前を去らせてそんなら
 ばと、娘を進ぜさうなおわさぢやと思召すか。女御后に成るとても、道ならぬ榮華を悦ぶ様な
 私どもではござんせぬ。氣遣ひせずとも、早う仲直らしやんせ。悉皆氣狂の沙汰ぢやまで」
 と嘲れは、「スリヤ氣狂の様に見ゆるかや」「様な段ではござりませぬ、ま氣狂でござりますは
 いの」ハア、はつと夫婦は顔見合せ、暫く詞もなかりしが、やゝ有つて花の井、「實にや思内に
 有れば色外に顯るゝ、氣狂とも狂人とも見ゆる筈、心は疾うから氣狂に成つて居る。其譯は、
 今日武藏殿の參られしは、京の君の首討つて渡せと、鎌倉よりの御難題、其爲に梶原平次景高、
 土佐坊昌俊の上洛、討つて出さねば叶はぬに極り、悲しや京の君様のお首を取りに見えたはい

の。お小いから夫婦の者が手しほにかけ、育て上げた彼のお子、畏つた、御勝手になされと、
そもや首が切られうか。殊更只ならぬお身の上、辨慶殿も斬りかねて、とつおいつ思案の上、
昔より無いならひではなし、人の見知つたお子でもなし、身代を立てまいか、其身代は誰彼と
詮議の上、年頃眉目容も相應した此信夫、夫とても、お家譜代相傳の人でもなく、命を下され
といふ程の、恩を見せたといふではなし、無體には殺されず、合點してはよも死ぬまい、何と
せうどうせう、斯うせうでは有るまいか。幸ひおわさも來て居やる、大人氣なけれど太郎殿、
信夫に執心なといひかけて、無理に女房にお貰ひなされ、そこで私が愾氣するは、憎い奴ぢや
と隙が出る、心得たと隙取るは、サア今日の只今から、信夫は侍従が女房ぢやと、獻々の盃し
た其上で、女房どもまづ斯うくぢやと譯をいうて、我女房に成るからは、其方が爲にもお主
の身代、死んでくれと退引きさせず、命をお貰ひなされぬか、是宜からうと談合づく、不調法
な女夫喧嘩も、お主の命助けたさ。そんならおれが娘は殺しても大事ないか、身勝な事をい
ふ、道しらず物しらずと、蔑しきも恥かしけれど、正眞の脊中に腹とやら、コレおわさ女郎、
了簡は有るまいか、夫婦の者の苦しみを、思ひやつて」とばかりにて、かつぱと伏して泣きけ
れば、夫も坐したる膝を改め、「浮世の中の無心といふに、是に上こす無心も有るまい。其返

報には夫婦の者を、八つ裂にもなされちつとも惜まぬ。惜まぬ命は二つ有れども、一つも今日の役に立たぬ、本意なき無念さ悲しさを、推量有れ」とばかりにて、はら／＼と泣きければ、信夫進出で、「扱もく、神ならぬ身はそんな事とは存ぜいで、年に似合はぬ恥しらずと思侮りし、十年二十年の宮仕も、たつた一日御奉公申しても、お主様に違ひはない。其御難儀が何と聞いて居られうぞ、私が様な者の首でも、お役にさへ立つならば、願うてもお身代に立ちたい、サア首切つて御用に立てゝ下さんせ。申し母様、四年跡の大煩、聾程藥は利かず、死ぬる命をお前の精力たつた一つで助かつたれど、其時死んだなと諦らめて下さんせ。私はお身代に死にます」と、聞きも敢へず飛びかゝり、抱きしめ／＼、「これつか／＼と物言やんないの、黙つて居よぞ。これ／＼此子はな、一人で出来た子ではござんせぬ、顔も知らず名も知らねど、父親が有る、其人を尋ねて渡すまでは指もさゝせぬ。率爾に斬らしやつたら、聞くこつちやござんせぬぞ」「コリヤやい／＼、如何にうろたゆればとて、母親ばかりで出来る子が、三千世界にあらうか。其上顔も知らず名も知らぬ父親を尋ね手渡するとは、何を證に尋ねるぞ。偽者、表裏者、得心せぬ者、無理やりに身代に立てうとは言はぬはい。子心にさへ主従の道を辨ふるに、見限り果てたる女め、娘を連れて早歸れ、心急かし、立つてうせう。女房此方へ」と

立ち上る。「なう申し、マ、待つてたべ、僞者といはれては、親故此子が頼汚し、顔も知らず、名も知らぬ、夫を尋ぬる印は是」と、上の一重を押脱け、右は替らぬ詰袖に、左ばかりが振袖の、濃き紅の染模様、橘ならぬ袖の香の、昔ゆかしく忍ばしく、「是を御覽なされても、仔細を言はずば御合點が参るまい。娘が聞く前恥かしき、昔咄なれども、私はもと西の國の在所者、親は所の何がし、十八年以前、頃は夜も長月の、二十六夜の月待の夜、私が所は諸方の入込、誰とは知らず袖をひかれて、あのよものよを言ふ間もなく、暗がり紛れのつい轉び寝、つらや人の足音に驚いて其人は、おき行く袂を捉ゆる拍子、斷れて我手に残りしは此振袖、假寝の情は、たつた一度の浅けれども、妹脊の縁や深かりけん、其月より身も重く懷胎し、友達衆の介抱にて、産み落せしは此信夫、父なし子産んでは家の恥、子を捨てゝ嫁入せよと、親々の意見、御尤とは思ひながら、二人の夫は重ねまじ、縁有ればこそ子まで産んだ物、此袖を知るべに尋ね逢はんと、國を出でて十七年、水兒を抱きかゝへさまよひ、種々の憂き艱難、あの年まで育て上げて、此子が縁の薄いのか、我身の縁の薄いのか、今に尋ねあはねども、此上にまだ五年でも十年でも、女の念力、是こそ娘よ父御よと、名のり逢はするそれまでは、蚤にも喰はせぬ大事の娘、相應に物の道理も忠義も知つたれど、お役に立てぬは右のわけ、卑怯でない、未

練でない申譯、永々と嘸お氣がせかう、サアお入りなされ。娘立ちちや、お暇申さう、コレ立ちやいの」と、いへど立ちかね見捨てかね、親子心の隔の一重、誰とは知らず信夫が脊骨障子越、ぐつと指いて一刻、うんと悶ゆる苦しみに、是はとおどろく母の親、侍従夫婦も仰天し、「ヤア殺人は武藏坊、かよる狼藉心得がたし、如何にく」と詰めかくる。母は泣くやら氣は狂亂、「扱は夫婦の衆とぐるになつて殺しやつたの、聽かぬく、本の様にして返しや」と、縋り喚けば、「こりややい、聲低に物を言へ」「いや高う言ふ、何故切りやつた」「夫れは段々仔細が有る、まあ手負を勞り介抱せよ」「何んぢや、勞はれ、いたはれといふ程なら、切らぬがよい」と放さねば、「待てく、見する物有り」と、肌押脱けば這は如何に、下著の衣の紅に、大振袖の伊達模様。「これ見たか、此片袖は其方に有らうが、播州姫路の福井村、十一兵衛が所の月待、二十六夜の假寢は、其方で有つたな」「エイ、其時のお前の名は」「オ書寫山の鬼若丸」「すればお前は娘が父御、其父御が又娘をば」「オ殺したは身代り、お主の役に立つるはい」「ハア悲しけれど、夫ならば恨はない。これなう娘、尋ねた其方の父御といふは辨慶様、御對面申し上げやいの」と、抱き起せば起されて、「母様何ぞおつしやるさうなが、耳が聞えぬ、もう目が見えぬ、必ず辨慶が側に居て、お前も殺されて下さんな、ア、術ない苦しい」といふ聲も、次第次

第にせぐりきて、早玉の緒も切れ果てよ、此世の縁は絶えにけり。「ハア悲しや、最早息がせぬ
はいの」と、聞いて皆々立騒ぎ、見れどもほとほりばかりにて、其甲斐さらになかりけり。母
は膝に抱き上げ、「扱もく浅ましや、如何なる因果な生れ性ぞいの、父御を尋ね初めたは五つ
の時、申し母様、餘所の子供衆には、父様も有り母様も有る、私にはなぜ父様がござらぬ、逢
はせて下されと言ひ初めて以來、一年々々智恵の付くに随ひ、譯を聞いて猶逢ひたいとせがむ
故、在所にも有るにあられず、其夜は都の衆も有つた物、もしやと都へ上つて尋ねても、知れ
なんだこそ道理、此方様で有つた物。可愛や此子は、一生父御を戀慕ひ、一生物を思ひ詰め、
今日といふ今日尋逢ひ、せめて一時半時も、我子か父様かと、一所にも居る事か、詞もかはさ
ず、しかも父御の手にかより、辨慶が傍に居て、母様も殺されなと、いうて死んだ心の内、如
何ばかり苦しかりつらん。父御の仕方も慘たらしい、同じ殺す道ならば、互に親よ娘よと、顔
も見たり見せたり、納得させての上ならば、是程には思ふまい。ヤレ娘よ、父御前こそつれな
くとも、母に恨は有るまいに、たつたま一度母様と、言うてくれよ」とばかりにて、空しき死骸
を抱きしめく、くどき立て、聲も惜まず泣きるたる。辨慶も諸共に、咽ぶ涙を押しかくし、
「よしな母が悔み事、咄を聞くと等しく、扱は我子と飛立つばかり、生頼も見たかッしが、な

まなか見つ見せては、未練の心もおこらんかと、生きぬ様に剥りし物、一たまりも堪へうか。辨慶とても木竹ではなし、生れてより此年まで、跡にも先にもたつた一度、てんがうな事して生れたる、我子と聞いて憎からうか、可愛かるまいか。其様に泣くを見て、太郎御夫婦の居やらずば」と、泣くより泣かぬ苦しさは、鳴蟬よりもなかく、泣かぬ螢の身をこがす、小唄も我身に知られたり。「是に付いても、親の恩の深き事、今取分けて思ひ知れ。唐土の樊噲が、母の小袖を母衣と名付け、戰場まで持つたりといふ、夫を學ぶにはあらねども、此下著は母の手づから縫ひ仕立てゝ下されし、汝に片袖を取られたれども、亡き母に添ふ心して、縫ひも直さず振袖の、此儘四國九國の戰場、今日の今まで肌を放さず持ちたればこそ、名も知らず顔も知らぬ親と子の印と成つて、十七年めに廻り逢ひ、主君の絶體絶命の、大事のお役に立つる事、偏に亡き母の此小袖に手を通し、親子を一所に引合せ給ふ、廣大無邊の親の慈悲、子故に親は名を上げる、能う死んだな出かしたな。とはいひつゝも息ある内、是こそ尋ねた父ぢやはいと、こんな頬でも見せたらば、嘸嬉しがらうもの、是ばかりが残多い。親も一生子も一生、言ひ初めの言ひ納め、せめて一口父様かいのと言うてくれ」と、生れた時の産聲より、外には泣かぬ辨慶が、三十餘年の溜涙、一度にせきかけたぐりかけ、侍従夫婦が貰ひ泣、四人の涙八つ

の袖、八つの時計を打ちまぜて、悲しい事の數々を、言ひ盡すこそ果しなき。辨慶はつと心付
き、「南無三寶、歎に紛れしか、半時の時計も聞かざりしに、早八つ、御首討つて渡さんと、梶
原に契約の刻限、時移つては事むづかし。サア太郎殿、京の君の首討つて渡されよ、是より我
は檢使の役」と、席を改め坐しければ、「實にく、公事に私の歎換へがたし、只今京の君の
御首討ち申す」と身づくろひ、信夫が死骸引寄せて、敢なく首を打落し、「サア受けとられよ」
とどつかと坐し、返す刀を我身の弓手の小脇に突き込み、きりよくと引廻す。物に動ぜぬ武
藏が驚き、妻はあわてゝ縋り付き、兎角の詞もなくばかり、「ヤア騒ぐまい武藏殿、我切腹御合
點が往かぬか、是なう御邊が細工の京の君の此賀花、尤大概は似たれども、實は雲の上人と、
地下人の色香の違、梶原が邪智強き眼に見咎め、詮ない事になつてはと思ふに付け、京の君の
傳とは、鎌倉殿もしろし召したる此侍従太郎が首添へて渡さば、天地を見ぬく梶原も、よち作
り花とはいふまい、誠の花と見せう物、信夫に犬死もさせまい物と思ふ故、御邊が細工に添へ
て遣る、心計の色香ぞや。吠ゆるな女房、是まで御存じない事を、それ泣いて奥へ知らするか。
萬事武藏殿の差圖を受け、おわさと中好ふ、御平産の跡々まで、心を付けるが良人への忠節、
心得たるか、泣くなく。サア武藏殿、時移る、首うつてたべ」「オ、理を聞く上は、辭退申

さぬ、觀念有れ」と拔放し、ひらりと見えし刀の影、首は前へぞ落ちにける。直に袂を押切り、二つの首を包むに餘り眼にもると、涙よ歎き果しなく、さらばくと、首を左右にかき抱き立上れば、「是なうしばし」と取付いて、「我は未來の約束せん」「我は親子の一世の限」「共に名残に今一度、亡き顔見せてたべなう」と、泣けど慕へど焦るれど、心強くも振捨て、見せぬも辛し見ぬも憂し、返らぬ道に憧るゝ、夫の別子の別、二つ歎を一筋に、見捨てゝ御所へぞ三重かへりける。

第四

道行伊勢土産

思ふ事、内外の宮に曳く鈴の、鳴らずばよもやさばかりの、参宮同者はよもあらじ。義經の方、京の君御懷胎、御産の紐もやすくと、時忠の御臺所、娘思の御願立、二人三人の御供にて、どれが主やら下部やら、皆一樣の染浴衣、著連れて笠のヤアこれの、肩にお祓伊勢土産、包む人目や風呂敷や、旅立つ比は曉の、明星が茶屋を跡に見て、馴れし都へ下向ある。櫛田の宿は名のみして、髪に擬へるぬめ帽子、其色艶も行く人の、袖に纏るゝ伊勢比丘尼、唄今の

目元は成る眼元え、晩にかならずまつ坂と、しなだれじやれて行く雲出、これぞ津の町かうの
彌陀、太神宮と御一體、佛神水波と分れども、隔てもなみの水たまる、窪田も越えて嬉し野や、
はてしなが野も打過ぎて、都の方へむく本の、木蔭にしばしやすらひ給ひ、参の時は一足も、
早う願のかけたさに、何處が何處やらわくせきと、せく心より此關の、尊き地藏もそこく
に、拜みし事のおろかさよ。あれく其處へ乗りかけの、馬士が小唄も外ならぬ、關のお地藏
は親よりも、ましぢやにあひのつまたもる、其一節も御慈悲の、餘りて深き其中に、わけて女
の妊帶、五月目を守らんと、此御佛の誓なれば、心に願かけまくも、忝しと伏し拜み、心も
足もいそくと、坂の下より鈴鹿山、山又山の土山に、誘ふや嵐、ちるや紅葉の亂れくて、
空にちりぬる散らし書、こゝは硯の水口や、田面におつる雁金の、一行列るごとくにて、跡や
先やと子供の参宮、お蔭での、抜けたとさ、えいくく、さつくさ、さつと流るゝ横田川、
浅く渡りて深きを知る、神の恵の動なき、石部の宿より梅の木村、薬も花の香に匂ふ、よう御
所風となぶられて、人目まばゆく袖おほひ、忍ぶほど猶聲々に、唄 あれは慥に都の上臈、姿優
しくしをらしく、さういうて派出ならず、移氣な人心、かい取袂のなりふりに、しんぞ此身を
打込んだ、オ、笑止く。うたふを聞けば聲の文、さすがに都遠からず、心勇みの花摺衣、千

種の錦古郷に、かへすも暫し名に高き、草津の宿にぞ三重著給ふ。唄今年や世の中よいとのよいとの、浦々里々、参宮道者の家々の家印、ござれ、是についてござれの、よいとの。長閑に治る君が代の、お禮参の人群集、鎌倉参勤京上、往來の人に荷ひ賣、「目川仕出しの田樂、鹽梅よし」と賣る聲に、物見だけいは道者の癖、我もくと立集り、「なうく」皆の衆、豆腐の始り、田樂の由來聞くまいか「コリヤよかろ、所望々々」と立ちかよれば、頼作言ふも商ひ口、しかつべらしく團扇を上げ、「東西々々、豆腐の因縁堅くとも、耳をすまして聞し召せ、昔々、天竺の達磨大師と申せしは、顔に似合はぬ豆好で、座禪豆と名付け、常に賞翫有りけるが、初めて豆腐を思ひ付くとて、壁を睨んで九年めに悟をひらき、なむおみとうふくと、奈落の鍋へ落入つたる湯豆腐も、終には浮み上る所を、南無あみ杓子のすくはせ給ふ誓願なり。扱唐土二十四孝の唐夫人といふ嫁御は、豆腐の姥に孝行者、それより和國辨當にひろまつて、煮染に成り、竹輪に成り、縮緬豆腐は細きをいとはず、お壁とは、白きを譽めたる大内言葉、お公家方には小野の道風、武家方には敵陣へ寄せ豆腐、名を萬天に揚げ豆腐、別きてこのくくく田樂と申し奉るは、忝くも白河院より始つて、都に祇園二軒茶屋、難波に生玉島の茶屋、菜飯に田樂ひんよよいと、神勇めにも成るぞかし。それにまさりし目川の田樂、けん

けんしたるお方には、雉焼にて参らする、いつかな不食なお人でも、此太鼓飯つぎの、底を叩いてでんく、田樂、脣に障へるや否や、吸込み飛込み、咽は鎌倉街道の名物なり」としやべりける。在り合ふ人々どつと笑ひ、「豆腐の因縁聞いたれば、心もはれやれよい慰」と、皆々別れて通りける。京の君の御母上、伊勢参宮の歸り足、姿は地下に寢せども、供の女中の取なりも、ほんじやりとして可愛らし。荷かたづけ田樂屋は、不思議さうに立寄つて、「ヤア何れもは、なみくのお人ではなささうなが、男切もつれず、伊勢参宮でござんすか」と、問ひかけられて御臺所、「さればとよ、遙か西國方の者にて候ふが、是なる二人を伴うて拔参り」と、半分いはせず、「ぬけくとした嘘つかしやんな、尤身の廻は田舎めいた参宮人に見えれども、物ごし爪はづれば都も都、内裏上臈のひんぬき」と、星をさよれて、はつと三人顔見合せてためらふ所へ、先走りの侍鐵棒ひきずり、「御上使梶原殿、義經の北の方京の君、めのと侍従太郎主従が首持たせ、お通りなるぞ、片寄りませい」と呼はらせ、鎌倉へ歸る急ぎの道中、御臺は斯くと聞くよりも、梶原が前に轉出で、聲も涙にせぐり上げ、「自は京の君が母、平産祈りの甲斐もなく、身二つになりもせで、刃に罹り死ぬるとは、天照神にも捨てられしか、宿世如何なる報ぞや。姫と侍従が死顔を、此世の名残に只一目、見せて給はれ梶原殿」と、消入るばかり

りになけかるれば、平氏景高ぐつと睨め、「京の君が母めとは、好い處で出くはせた、己も一つ首にして、鎌倉へつれて行く。あれ引ツくゝれ家來ども」承ると一度に寄るを、「どつこいさせぬ」と田樂屋が、荷の枋押取つて、薙立てく叩退け、御臺の世話を焼豆腐、後に圍うて立つたるは、鹽梅よしとぞ見えにける。「ヤアいはれぬ味噌めが肩持だて、彼奴からまづ繩かけい」と、聲で威せばせよら笑ひ、「商賣の豆腐屋が、田樂料理の鹽梅見よ」と、枋のつくく竝んだる、主も家來も一くるめ、撲惱されてせんかたなく、一度にはつと逃けちつたり。御臺を始め附々まで、「思ひがけなき田樂屋が、身にひつかけての働は、知るべの人かどうぞいの」と、言ふ間程なく大童に成つて立ち歸れば、「コレく此方は何人で、御臺様の御介抱、名は何といふ人ぞ」と、せはしけに向ひかくれば、「エ、急な所で名の鑿穿、いふ間もござらぬ。義經様の由縁と聞いて、世話するからは、何ぞで有らうと思はしやませ。アレ爰へ、敵の奴ばら、一度で懲りぬ手籠の鹽梅、二はい三はい八はい豆腐、ざくく豆腐に刻んでくれん」と、追ひまくりほつ拂ひ、又立歸つて、「コレくく、爰には居られぬ早お退き、跡は拙者が受取つた、早う早う」とせき立つる。「いやコレ重ねて禮いふ爲、そもじの名をばついちよつと」「エ、此瀬戸ぎはに根問ひ葉問ひ、是非言へならかい摘んで、かく申す某は、義經様の妾、靜が爲には現

在兄、親磯の前司に勘當受けし藤彌太と申す者、是から跡は追付いて、道次申しましょ。一足も先へお出でく」「扱は靜の兄御よの、靜どころぢやござりませぬ、急にく」と主従三人、都の方へ落しやる。平時景高取つて返し、「ヤア下主め、ようもく邪魔ひろいで、三人共に逆したな。代に己が首こそけ落す、觀念せよ」と一文字に切つて掛る。「シヤ、まつかせ、心得し」と、枋で丁ど受留むる、擬勢ばかりに梶原が、刀を其儘豆腐屋が、枋も動かす暫しが程、相手と相手が顔見合せ、前後を見合せ兩人が、耳と耳とに互の口、何やら囁きうなづき合ひ、「出来たく、此上仕おほすれば、コリヤ藤彌太、約束の通り大名ぢやぞ。都には身が家來、番場の忠太を残し置く、言ひ合せて首尾能くせよ」「ハ、ア天晴梶原様、斯うした仕組で付込むからは、義經の首は我手の内、都の首尾を氣遣あられな」「オ、さうぢやく、此上ながら、人に共謀ぢやくと悟られな」心得たりと又立向ひ、二打三打義經を、騙かる爲の仕組の切合、遠い術を藤彌太に、追はれて態と逃けて行く、梶原平時が恐ろしき、工の程こそ三重の唄扱も泰平長久の、弓も袋に納まれば、矢竹心の武士の、敵に後を見せいで、戀に腰をぬかした。名におふ靜が一奏、祕曲の底を堀川の、御所は酒宴の表座敷、いつにすぐれて賑はへり。御酒の機嫌もよしつね公、靜が膝に寄添ひ給ひ、「何時聞いても美しい、器量につると琴の音色、取分

け今日より義經が、北の方に直すれば、琴の調子も一際勝れ、我妻琴の位の高さ、母を呼寄せ
悦ばせいと言付けしが、未だ來ぬか、早うく「あい」と重ねて急ぐ召使、しき浪よする磯
の前司、「只今は」と立出づる、京に名うての扇の指南、夫に離れて鬢もなき、ひつきき髪の
二つ折、色はなけれど香は残る、昔を思ひやり梅の、花の姿のあたり物、惜しや老木とひね
らん。「母様お上りなされたか、我君のお待ちかね」と、水入らずの親子の取次、「磯の前司参
上」と、手をつけば義經公、「ア、堅いはく女の三つ指、物にたとへて見る時は、延紙に書
いたる一筆啓上、堅いも理、神代以來承らぬ、女の名に磯の前司、其かたみを取置いて、
向後は義經が姑御寮、斯うばかりでは合點がいくまい、お知りやる通り、頼朝の咎めによつ
て、あつたら花の京の君、散された閨の淋しさ、靜を今より北の方、本妻とさだめねば、鎌倉
殿の疑はれぬと、家老どもが勸によつて、今日より靜は奥様、此目出度さを言聞かせ、老の
身の悦に、重ねくの悦を」靜にはなせと有りければ、「申し母様、自が身の上は、冥
加に餘る君のお情、まだ此上のお情は、お前の勘當遊した、兄磯の藤彌太様、縁といはうか、
不思議といはうか、京の君のお袋様、御参宮の下向道、梶原が見咎めて、危き所を身にかへ、
比類もなき大手柄、おけがもさせずお供して、此館へお歸りなされ、顔見た時の恂り嬉しさ、

思ひがけなき對面も、兄弟の縁の深さ」と、聞くに驚く母の前司、「フウ何といやる、兄の藤彌太が此御所へ來て居るとや」「アイ戻らしやつたは一昨日、此度の働も、底の心は勘當が赦されたさ、我君も感じ給ひ、親子の中を直せと有つて、刀まで下さりました」「なんぢや、刀まで賜はつた、是はく冥加ない。して其兄は何處に居るぞ」「サア兄様は刀の冥加、武士に歸つた身の悦、神詣して來うと、今はお留守、追付け下向なされう程に、勘當赦してしんぜて」と、靜が願ひに義經も、「赦してやれ」と御挨拶。「ハア恐有りや、我々しきの忤が勘當、あつと申す筈なれど、其處を得言はぬ此母が、磯の前司と申す名は、死別れし夫の本名、連合も古へは武士の數にもいりし人、彼の兄が惡黨にて、武士を忘れし賭博好き、世間を噓で言ひ掠める、其おどもりが親にもかより、浪人さした不孝者、かたはな子は猶可愛と、親の貧苦は厭ひもせず、七年前の臨終にも、念佛は申さず、此のらめは何處に居る、根性を直しなば、爺が勘當悔しかろと、思ひ死がいとしさに、ハテ案じさつしやるな、連合の死後に此母が、磯の前司と名を呼べば、夫婦此世に居る同然、心さへ直つたら、二親一所に赦すも同然、オ、さうぢや嬉しうおぢやると、夫れで浮世の思をはらし、迷はぬ正念大往生、連合に約束の、詞も反古にならぬから、女にあらぬ男の名、磯の前司と世にうたはれ、今様指南のいとなみに、靜は

育てあけたれども、兄が性根はまだ直らぬか、詫言にはなぜ來ぬか、待ちに待つた母なれど、
 立歸つて見る時は、詫の仕様が氣にいらぬ。靜何故というて見や、我君のお由縁へ御奉公申せ
 しも、和女や母へ繋がる縁、何かさし置き先母が方へ來て、今度の様子は斯うくと、言うた
 らおれが呵らうか、待つ所へは來もせいで、お館へ來て手柄顔、殊に前司が來るを知つて、爰
 に居ぬは出違うたか。なんほ父親の遺言でも、性根を見ねば赦されぬ。斯う急入れるも其方が
 大事、又彼奴が無法出さば、兄にかゝつて妹まで、君の愛想も盡きやうかと、彼方此方を思ひ
 子の、性根をしかと見るまでは、お返事暫く御容赦」と、女ながらも後先思ひ、道理を立て
 申せしは、磯の前司と男名を、よばるゝ器量と知られたり。「ホ、ウ母が詞尤々、此義經が
 謂はれざる挨拶より、落ちぶれたる昔の咄、座もめいつて氣も浮かぬ。今いふ通り靜は本妻、
 姑の磯の前司、重ねて舞も望まれまい。何と此座をわつさりと、其儘一さし扇の手、所望々々」
 と有りければ、「ア、つがもない此年寄、舞うたとて諂うたとて、何がわつさり致しませう。是
 非御所望なら装束して、衣裳で化かす老の舞、此處ではお赦し下され」と、辭退も聞かず、「い
 やいやく、装束の舞は奥で見、年寄ればとて捨てられぬ、伊勢物語の業平は、九十九に成
 る婆とさへ、寢られた例も有れば有る、平にく」のお詞に、靜もそばから、「これ母様、御辭

退は却つて慮外、さあく」とせり立てられ、「是非もない、そんなら舞ひましょ、色も香もない此母が、扇取る手もしわだらけ」と、突と立つて押開き、唄北嵯峨の踊は、葛籠帽子をしやんと著て、踊る振が面白い、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たい物ぢや、所々お参りやつて、とう下向めされ、とがをばいぢやが。「ホ、、、、オ、恥かしやお笑ひ種、此舞直しはあれにて」と、微笑み行けば義経も、打ちつれ奥に入給ふ。跡に靜は兄弟思ひ、「母様お出ではしれて有るに、此兄様なせ遅い」と、氣を揉み焦る後より、「北の方様靜様、我君の召します」と、腰元姿見すほらしく、立出で給ふ京の君、靜ははつと恐れ入り、涙と共に御手を取り、「定つた御本妻、京の君様ともあらう身が、鎌倉の聞えを憚り、信夫が名をかりそめに、腰元姿の勿體なさ。お身の爲とは言ひながら、賤しい靜が上に立ち、信夫何せい斯うせいと、人目をつくらふ主顔も、只ならぬお身の上、お腹にござる兒様を、産むまでの辛抱と、堪忍して下さりませ」「なう斷に及ぶ事かいの、辨慶の心つれなくば、今は世になき我命、誠をいほど尼法師とも様をかへ、先立ちやつた信夫の跡を弔ふが道なれども、輪廻穢い女の心、夫までは得思ひ諦めぬ。斯うして殿のお傍に置いて下さるが、皆の衆の情忘れはせぬ。構へてく、遠慮なしに押しこなして、信夫々と頼むぞや。かく言ふ内も人目有り、北

の方様いざ此方へ」と、座をたち給へば抱きとめ、「其お心根が猶おいとしい、上々様に苦はない物と思ひしに、こんな災難も有る物か。人の名も多いに、信夫とは誰が付けて、今では北の方様の、お身を忍ぶ、世を忍ぶ、いまくしい名で有るはい」と、返らぬ事をかきくどく。遣戸口に咳拂、兄藤彌太が立歸れば、靜は色目を覺られじと、「コリヤ信夫、兄様の今お歸りと、母様へお知らせ申せ」「アイ」といらへて立給ふを、藤「ア、これくくく、先待つた信夫殿、母人の説言は早うても遅うても、いや應言はさぬ義經公の取持、理窟くさい母人も、今度の鼻が手柄を聞いて、四も五もいはず合點で有らう」「イ、エお前や私が思ふ様に合點なりやよけれど、物事に念入る母様、假へ大將のお詞がかゝらうが、どんな手柄をなされうが、夫れには乘らぬ日比の氣質、ぬらりくらりの間に合者、心の直つたを、とつくりと見とどけ、其上の事とおつしやつた」「ハテ小むづかしい、心の直る直らぬは、嗅いで知れるか、見て知れるか、其固意地に懲りはてよ、今朝からの神參、上加茂下加茂祇園の社、母の固意地止め給へと、祈る程にける程に、日脚も傾く腹も傾く、幸の二軒茶屋、立寄る鼻ももと豆腐屋、田樂串から出世した、二本指の身祝酒、俄武士の尾も見せず、微醉機嫌で立出づれば、おいくと跡から呼ぶ、歸つて見れば面目なや、指付けぬ悲しさ、とんと刀を忘れて置いた。何もかも殿が下され、此様

な侍になつたれども、なうく同じ指物でも、田樂串とは違うて、刀脇指は指しにくい。是信夫殿、此様に身の恥を打明けて言ふ正直男、恥の次に心の思はく、恥かよさうとかよすまいと、信夫殿のお返事次第、此屋形へ來てちらりと見るより、首だけ惚れて居まする」と、ほうど抱付き振袖の、肌へ手を入れしなだるれば、「こりや兄様てんがうばかり、勿體ない」と引放せば、「いやてんがうちやない、眞實惚れた、妹のつかふ腰元に、兄の惚れるが勿體ないとは、如何して信夫が勿體ない、勿體ない譯聞かう」と、問詰められて南無三と、驚きながらさあらぬ風情、「エ、尖々しい詞咎め、勿體ないというたはな、親の勘當願ふ身が、其訴訟はほつて置いて、脇道の小さいづら、親の冥加に盡きさしやろ、勿體ないというたが誤でござんすか。母様は奥の間で、御所望の今様一さし、お装束も出來たやら、笛も鳴る鼓も調べる、お前も餘所から拜見して、舞も濟んだ其上、目出度う親子の御對面、わしも信夫も三絃の役人、心もせければお先へ」と、言紛らして急ぎ行く。藤彌太は兩人が、詞のはしく素振まで、ぐつと吞込む頬魂、鎌倉よりの忍とも、奥にはしら髪之母の舞、聲の細りも今様當流、琴三絃の音も戀に、明寝衣の衣の肌薄し、辛いぞ憂いぞなんとせう。藤フウ羽は京の君を信夫にして、信夫が首を、けうといく、やつちやしてこい、此通り注進せうか。いやくく、まだ暮れきらぬに御門の

出入、咎められてはむづかしい、ハア、どうせうな」唄、深き思の淵となる。「ホウそれよ、せい
ては事を仕損する、此藤彌太を犬ともしらず、味う参つた判官殿、ヤア奥へ往て勘當の、いや
いやく、妹が今の素振、」唄見えに付け聞くに付け、胸にせまりし數々の、袖もかわかぬ沖の
石。歌の唱歌に引換へて、一筆知らせの硯石、床の料紙を幸ひと、蓋押明けてする墨より、歪
む心を試さんと、三絃たづさへ靜御前、空酔つくる千鳥足、「唄ゑうたとさく、土手の細通危
ない、合點ぢや、危ないく。兄様何を書かんす」と、聲かけられて悔りし、あたふた袖に狀
押し隠し、「其方は三味の役ではないか、爰へ來ては間が缺けう、サアく奥へ」「イヤ大事ご
さんせぬ、母様の舞も一番濟んだ、我君の御機嫌、酒一つ飲め、も一つ飲めとひら強ひに強ひ
られて、唄、酒の上句に亂るゝかたを波、彼方へざらり、此方へざらり。彼方よりは此方さん
の、唄ざらりく、さらくさつと、書かしやんした今の文、隠すは曲者、其れ見たい」「いや
其文とは、アノ物よ。隠した譯は彼信夫に、思ひらくべく候」「唄いよし御けんと書いたる
は、ほだしの種か、花薄。ほんに誓文、戀ぢや有るまい、欲と見た」「慾とは妹、何を見た」「ま
だ直らぬ心を見た、人には漏らさぬ兄妹中、サア有様に言はしやんせ」「オ、言へならば言は
う、我也言へ」「わしに言へとは何の事」「ヤアとほけまいく、信夫といふは京の君、濡にこ

と寄せ抱付いて、腹帯を慥に見た。「夫れ見付けて如何さしやる」「鎌倉へ注進する」「エイ、フウ扱は勘當の詫言とは」「オ、嘘ぢや、梶原と心を合せ、伊勢路から付込んで、靜が兄が味方顔、釋迦でも喰はす鹽梅よし、かうした思案はまた田樂、義經の首を串ざし」と、驅出すを引止め、「エ、曲もない兄様、惡事に與して身が立たうか、恐ろしい工の段々、聞いた者は妹ばかり、外へは聞えぬ奥の囃、鼓や歌にまぎるよも、お前の仕合、親の慈悲。サア舞の終らぬ内に惡心を翻し、善心に成つて下され」と、兄を思ひの眞實心、涙は詞に先立てり。「ヤア兄が出世に不吉のほえ頬、ぞつこんしみ込む此大望、いつかないかな翻さぬ。ばれ出すからは一時勝負、いで注進」と又かけ出だす、先に靜が立塞り、「やらぬく、何處へもやらぬ」「エ、面倒な女郎め」と、ずはと抜いて切りかくれば、得たりや紫檀の延棹に、はつしと受け、「妹を殺さうとは、人でなしの猫の皮、不幸の上塗ばち當り」と、拂ふ刀を又付込み、「此世のいとまを取らさん」と、太刀筋血筋の遠慮もなく、兄は強力刃物わざ、妹はかよわき無刀のあしらひ、三味と白刃の鏝音筒鳴、いらつ懸聲二上りに、心もめいる三下り、三世の縁の糸筋も、斷れてふたよびかへらうび、天柱、糸藏さんぐくに、亂れちつて争ひしが、終には三絃切折られ、逝ぐる靜を藤彌太が、取つて引敷く膝の下、びつくと働かせず、「サア此兄と一つになるか、否や

といへば突き殺す」と、胸に刀を指付くる。物音奥へ聞えてや、母は装束脱ぐ間もなく、走り出でて拔打に、兄が肩先ずつばと切る。うんととのツけに反りながら、「死にぞこなひの老老め」と、親に刃向ふ極悪人、寝ながら静が諸足搔けば、どうど倒れて立上らんと、蠢く藤彌太起しも立てず、胴腹ぐつとさし通す、老女の手なみ早業に、手足を張つて苦しみしは、心地よくこそ見えにけれ。母が心ははり弓の、藤彌太が髻片手に掴み、ぐつと引上げ面打守り、「コリヤ此刀を拔けば命がない、息の有る中言ふ事有り、眼が未だくらまずば、此親が扮装を見よ。烏帽子水干男の装束、母と思ふな父親の磯の前司、エ、汝淺ましい、本心に立歸らば、爺が勘當悔みをろと、母に前司が名を譲り、待ちに待つた甲斐もなく、惡に惡を積み重ね、現世後生を迷はす故、磯の前司が蘇生して、手にかけたを覺えしか」と、烏帽子装束かなぐりく、藤彌太に礎と打付けて、「是までは父の役、前司といふ名を力にて、思ひ切りは切つたれども、母が身にもなつて見よ、現在我子を手にかける、母も因果已も因果、憎けれど佛に成りをれ」と、わつと叫入るを見て、静も共に泣きくづをれ、「言うて返らぬ此有様、せめては最期に心を直し、親子兄弟睦じい、詞をかはして死んでいの」と、取付き歎く其聲の、藤彌太が耳にや入りたりけん、むつくと起きて眼をひらき、「ハッア誤つたく、親を親とも思はぬ我を、親は我子と思召

し、父の名を母に譲り、勘當を赦さんとの、御恩を無下にするのみか、天の冥罰二親の、御手にかゝる不孝者、元此の館へ入込みしは、梶原と心を合せ、京の君の實否を糺し、義經公を科に取つて陷さん爲、二つには番場忠太、京都に残し置く間、牒し合せて夜討の手引、大將の首とらば、梶原が取持にて、大名に仕てやらうと、欲心に親の慈悲を忘れ、御手にかゝりし今此時、一生の非を改め、善心になつたれば、最期にせめて寸志の忠義、是れ靜、今宵鎌倉武士どもが、夜討にせんととの仕度有り、必ず御油斷なさるゝなと、義經公へ申上ぎや。言ひ置く事も是まで」と、貫く刀に手をかけて、拔けば絶え行く息の往來、生死の道ぞ定めなき。「エ、仕成したり残念や、其根性をまあ三寸、早う直してなせくれなんだ。辨慶殿の娘御は、女なれども、父の手にかゝつて忠義の死、我も母が手にかゝつて、死ぬるに二つはなけれども、根性の直り様が遅さに、犬猫の死んだ様に、此死にざまは何事」と、空しき死骸に取付いて、老の繰言親と子の、別はつきぬ歎なり。靜は涙のひまよりも、「いうて返らぬ御悔、鎌倉勢寄すると有れば、歎きは無用。是れ母様、もう何時でござんせう、今宵も夜半、あの太鼓は、時うつ數とも思はれぬ、ほんにせはしい鐘太鼓、如何やら世上も物騒がしい、必定夜討に疑ない。此次の間に釣つて有る、鐘をならせば御家來衆が、駆け付ける豫ての相圖」「滅多無性に撞鐘は、此母が心得し」と、走り行く

より相圖の鐘、かうくとこそ三重響きけれ。靜小褌をかい褰け、凛々しけに聲を上げ、「夜討が寄せて候ふぞ、起合ひ給へ」と呼はれば、奥口取々女中のさわぎ、「何ほ起しましても酒の酔、殿様のお目が覺めぬ」「覺めいで是がよい物か、わしに任しや」と立掛り、御具足箱の蓋押明け、鎧取出し重たけに、提けるやら曳きするやら、御寢所の障子押明けさせ、お枕元へ投げやれば、天性其器備つて、武勇にさとき御大將、御鎧の金物の、からめく音に忽然と、御目も酒の酔もさめ、むつくと起き、鎧引さけ端近く立出で給ひ、「如何にく」と宣へば、有りし次第をこまぐと、申す内から手ツとり早く、鎧直垂小手脚當、金作の御佩刀、弓矢甲の次第よく、取つてあてがふ機轉の靜、「天晴御身は弓取の、持つべき妻よ」と御戯れ、さわやかに出立ち給ひ、「誰々も休息せよと私宅に歸せば、宿直の武士も有合ふまじ。假し義經が手をおろさば、何萬騎有りととも皆殺し、馬引け」と呼はつて、縁の上に突立ち給へは、靜長刀かいこんで、お側をはなれず引添ふ所へ、時も移さず夜討の大將法師武者、表門を込入つて、廣庭に駒駆けする、「義經の首給はらんと、土佐坊昌俊向うたり。最早廻れぬ、御腹」と、聲々に罵るにぞ、「ヤア義經を討たんとは、しをらしき土佐が夜討よな。相手には不足なれど、此世の暇とらせん」と、太刀抜きそばめ廣縁より、ひらりと飛鳥の早業さそく、靜長刀かひぐしく、

切りはらひ薙ぎ廻る、勢に避易して、寄手もたやすく進み得ず、しばし支へて居る所へ、武藏坊を始として、源八兵衛、伊勢、駿河、追々にかけ來り、御大將に引添ひしは、天帝修羅の戦に、須彌の四州の四天王、帝釋天を守護せしも、是には過ぎじと謂ひつべし。寄手は臆せぬ土佐坊昌俊、采配振立て諸軍の下知、辨慶いらつて進み出で、「坊主の相手は坊主が好い、引くな昌俊、逃ぐるな土佐」と、聲をかけて飛懸れば、擬勢にも似ぬ土佐坊昌俊、逸足出して逃行くを、何處までもと追うて行く。源八駿河も拔連れく、殘る軍勢一人も、餘さじ物と三重切立つれば、さしもの廣き堀川御所、塵灰もなく逃散つて、御所もひとつそとしづまつたり。かゝる所へ御門の脇より、武者一人寄來り、「土佐坊昌俊是に有り」と、弓矢たづさへ突立つたり。伊勢の三郎とつくと見、「辨慶にほつかけられ、跡も見ず逃去りし、其昌俊とは扮装の、そくばくかはりし鎧直垂、但し鎌倉殿の御内には、土佐坊二人有るやらん、實否を申せ」と詰掛くる。「オ、不審尤なり。先達て我名をかり、寄せ來りし土佐坊は、梶原が郎黨番場の忠太、只今向ひし某こそ、左馬頭義朝公より鎌倉殿へ二代の忠臣、澁谷土佐坊昌俊なり」と、直平頭巾脱捨つれば、けにも疑ふ所なし。伊勢の三郎ゑせ笑ひ、「いかめしき忠臣呼はり、いつぞや日の岡にて出合ひし時、退引ならぬ親の敵、討つ場を討たぬは判官殿、お爲くを誠と思ひ、義

を知る武士と思ひしに、偽をもつて命を助かり、今此所へ寄せ来るは、取り所もなき表裏者、刀汚しと思へども、義盛が親の敵、一分試にためしてくれん。いざ来い、勝負」と身繕ふ。「オウ義盛が疑尤千萬、それにこそ仔細有り。先此一通、大將の御覽に入れてくれられよ」と、鎧の引合より取出し、差し出すを取次いで、義經に奉れば、いぶかしながら押開き、見れば牛王に血判せし、野心なき起請文、大將猶も不審はれず、「イヤ昌俊、此起請の文言は、義經に引き敵たはど、日本大小の神祇の御罰を請はんと書きながら、今宵夜討に寄せたると、起請とは相違せり、心底如何に」と仰せける。「さん候ふ、鎌倉殿、梶原父子が申すに任せ、彼奴を君の討手と有る、元來とがなき義經公、梶原ばかり上しては、御大事と思ひしゆる、某遮つて望みしは、討手に言よせ罷上り、御兄弟の御中、日月の如くせんものと、思ふ心を梶原に見すかされ、其場の争ひ武士の意地、義經の首取つて罷歸るか、さなくば昌俊が骸を堀川の土に埋むか、二つに一つは違へじと、一通の神文、鎌倉にて書きし故、頼朝卿は申すに及ばず、梶原まで疑晴らし、肌ゆるさすより工を聞き、かれが盗む平家の廻文、先へ廻つて奪ひ取り、義盛へ渡せしは、君に難儀をかけまい爲、我は澁谷金王丸とて、義朝公より譜代の家來、頼朝卿も判官殿も、頭の殿の御形見、大切に思ひ奉れば、何れに最辰依怙もなし。鎌倉殿へも起請

文、判官殿へも起請文、二通の起請を反古にせじと、夜討に寄せたる昌俊が、心を見する此
簾」と、重藤と共に投げ出すを、伊勢三郎押取つて、見れば弓には弦もなく、矢尻を抜いたる
簾の矢殻、けに敵對はぬ證據ぞと、大將を始め義盛も、心を深く感じ入る。昌俊重ねて、「是
伊勢の三郎、日の岡にての約束違へず親の敵、土佐坊昌俊討つて本望とけられよ」と、襟押し
くつろけ待ちかくれど、義盛はなかくに、昌俊が忠義を感じ、討たんず氣色はなかりける。
義經深く感心有り、「かくまで我に忠義の土佐坊、伊勢が討たぬも理なり。此上は存へて義經
に仕へよ」と、仰せも果てぬに呵々と打ち笑ひ、「昌俊が主君は鎌倉殿、討手に向ひし判官殿、
刃向はざるは義者の道、奉公せよとは愚の御説、昌俊が此體、堀川の土とならずんば、鎌倉殿
への誓紙は反古、生きては武士の名の穢、此御所の庭を借つて、義盛の手に掛れば、不忠と呼
ばるゝ事もなく、二枚の起請も武士も立つ。さりながら判官殿、我を我と思召し、存へと有る
お詞は、生々世々に忘れまじ。心にかゝるは御兄弟、御中和睦を此世にて、見奉らぬ残念々々、
此上ながら御中よく、未來の御父義朝公、我にも見せて給はれ」と、目にては泣かぬ武士の、
詞が直に涙なり。大將御目うるませ給ひ、「今の世の人心、士農工商に限らず、誠に立てゝ誠
に書く、誓言誓言皆反くに、汝は夫に引きかへて、偽に誓紙を書き、誠に命を捨つる事、亡か

らん跡まで、汝が譽を残す爲、祇園のお旅に隠なき、官者の宮に相殿せさせ、誓文の神に崇むべし」と、御感の詞末の世に、十月二十日の誓文祓、此昌俊を祭るとかや。「ハ、ハ、ハ、恐れ有りや有りがたし、人数ならぬ昌俊、命一つ捨てずんば、古今無雙の御大將の、かゝる情を聞くべきか、未來の譽此上なし。サア義盛、首取つて父に手向け、年來の本望をとけられよ」と、すつとよつてどつかと坐す。義盛も此上は、辭退申すに及ばずと、太刀抜き放し後に廻り、「伊勢の左衛門俊盛が一子、同名三郎義盛、親の敵只今討つ。昌俊殿御免有れ、弓矢擁護の八千矛の神、許させ給へ」と振り上ぐれば、首は取へなくをちかたに、重ねてつくる鬨の聲、敵かと思ればさにあらで、源八兵衛、騎河の次郎、鎌倉勢を追拂ひ、勝鬨あけて立歸り、今夜夜討の大將を、討漏しては候へども、武藏が追掛け候へば、追付け召連れ参るべし」と、申上ぐれば御大將、「ヤア今夜は鷄望喜速の日、戦を急ぐべからず。夜は何時ぞ明方近し、一番鷄の鳴くを相圖に軍を出し、逃げ潜む奴原を、片端より切盡せ、是れ義經が軍慮の大事、旁其目心得よ」と、御下知智謀は吳子孫子、張良陳平韓信に、諸葛が術を暗んじ給ひ、しかも劔術早業は、雲にも翔り水にも入る、龍に翅や虎の巻、七書を胸に疊みこむ、御大將の御勢、恐れぬ者こそ三重なかりけり。

第五

明渡る、野邊も山路も照る空に、敵の心はくらま道、夜とも晝とも辨へず、遡ぐるを追掛けほと詰めて、土佐が乗つたる駿足逸物、おろしも立てず飛乗つて、相合馬の二人乗、居喰は武藏坊主の好物、尻馬に打跨り、馬廐神の暴れたる勢、鞭振り上げて丁くく、人と馬とを砧の拍子、しつていからころさつくさ、はいく沛艾打立て追立て、辻も小路も飛越えはねこえ、室町通横切りに、堀川御所の門前に、乗留めて大音上げ、「土佐坊昌俊生捕つて参つたり」と、呼はる聲に義經公、源八兵衛伊勢駿河、一様に躍出で、「コレく武藏、そりや違うた、土佐坊は義盛が親の敵、夜前手にかけて本意をとけた、そいつは贗者番場忠太」武「ヤア道理で滅多に面を隠す」と頭巾を取れば、武「ハア番場の忠太、昌俊を出しにつかふ土佐の贗ぶし、此生ぶし三人中へ振舞ふぞ」と、馬上にぐつとさし上げて、「受取れやッ」と投付くれば、腰も折れぶし足立たず、蠢きながら手を合せ、「土佐に似せたも梶原の皆指圖、忠太が命助けて」と、吠えぬばかりの見ぐるしさ。武藏坊馬乗放し、忠太が背骨をしつかと踏まへ、「助けるは坊主の役、己に似合うた戒名付け、引導渡して得させん」と、三尺五寸をしやにかまへ、「汝元來梶

原が家來ながら、昌俊と嘘をつき、自業自得果、終には轉りと素首を落され畢んぬ。ア、悲し
 かなや、今日只今昌俊が名を藉つて殺さるゝは汝が損、其損を名に取つて、正尊と付けて
 こます、喝」と言うて打つ太刀に、首は飛んでぞ死してける。扱こそ賢と正眞の、土佐坊昌俊
 土佐坊正尊、二人の土佐が名の紛れ、義經公に敵たひしは、此正尊が事なりけり。判官御悦喜
 ましくて、「家來といへどもさす敵なれば、梶原を討つたも同然、勇めやく」と宣ふ所へ、
 女中の預黒井の軍治罷出で、先達で靜御前に仰付けられし今様の女舞、早御舞臺も成就し、
 役人残らず相詰め候。直に御覽有るべうもや」と申上ぐれば、判官彌御機嫌能く、「老中が今
 度の勳功、勞をも晴す爲、早始めよ」と、御説も君が御代長き、末廣扇今様舞臺、賑ふ御所こそ三重。

花扇邯鄲枕

謡 浮世の戀に迷ひ來て、く、思をいつか晴さん。「是は色里のかたはらに住む者なり、我好
 色に身をやつし、太夫、天神、あるひは夜發の假寐にも、露の情を受けしより、露の情の文字
 を直に、名をも露情大盡と、もてはやされしも今ははや、親の勘氣に肌寒き、紙子の皺のよる
 となく、ひるともわかす通ひしに、いまだ色道の悟を開かず、誠や在原の業平を好色の神にい

はひこめし、岩本の社へ歩を運び、諸分手管の道を辨へ、ついでなれば島原の、昇夫が方へ立寄らんと存じ、謠只今彼里へと急ぎ候」通ひなれし、道は昔にかはらねど、變る姿と口の端に、いゝ編笠の一文字、西にかたむく日影さへ、しゆじやかの野邊に照添ひて、諸行けば程なく出口なる、こんたんの宿に著きにけりく。「ハア、昔にかはらず三枚肩でおすはく。コリヤたまらぬ、ア、浦山しの廓通ひ」と、人目忍ぶの軒の下、笠かたむくる暖簾のかけ、主の昇夫内より出で、「ア、是々、謠なら聞きたうない、通りやくく」「いや苦しうもないおれぢや」「どなたぞい」と笠を覗いて、「エ、イお前は、扱てもお前は露情様か、是はしたり」「なんと久しやく、命あればぢや」「先御息災」「そなたも無事で重疊々々」「扱此お姿は」「はて愚智な事を問ふ、いはすと姿で推量しや。とかく傾城質と灰吹は、青い中に賞翫なされ、粹に成ると追出さるゝが一時、てつきりと廓へ行かば、色の褪めた灰吹男と、唾吐きがなするであらう。そちは辛い顔もせず、はつばすつば、忘れぬく」「扱は左様か、ハテお笑止や、それは氣の毒せんばいりで出来合を上らぬか、エ、折悪い御臺の留主」と、獨打つたり舞ふを見て、「イヤく、只今は所望にない、心づかひ無用々々」「然らば一種拵へて、久しぶりのお盃、どりやお伽上げませう」と、押入より枕取出せば、「コリヤ珍しい色めいた文枕、いはれが聞きた

い」「されば其張枕は、此里の妓様方、紋日の催促身請の相談、付文投文、或は付合ひ間夫狂ひ、憎いかはい嬉し悲しの、種々無量の文どもを一つに集めて、鼻が仕事に魂膽の張枕、是をなされてまどろみ給ひ、來方行末の悟を御開き候へ。我等は其間、酒の爛して參らん」と、布圍引被せ入りにける。「エ、きさく者ぢや、是非に紙花と出たい所、今はやうく鼻紙にも」紙子の袖を枕にあて、けにや廬生が見し榮華の夢は五十年、我も此一睡に、昔の夢を見るやと魂膽の枕に臥しにけり、く。明廓通は皆駕籠で押す、おれも通へど駕籠昇いておす、押手勝手も紛ひなき、昇夫が門に駕籠かきする、爰ぢやくと内に入る。「いかに露情に申すべき事の候」「そも如何なる者ぞ」「いや私でござります」「手代の彌六か、こは何故」「とは御吉左右御勘當のお詫かなひ、お迎に參りて候」「來たか、てんとびやくらい嬉しやく、イマまた己が親父程有つて、餘程にもてるく。扱思ひがけもない、どうして急に御免された」「是非をばいかではかるべし、御身勘氣を赦さるべき、其瑞相こそましますらめ。早々駕籠にめされ候へ」「おつと心得」のり移り、「宿へ歸らば來る事ならぬ廓の見納、是れより直におせく」と、簾上ぐれば紙子の袖も、故郷へ歸る錦の袂、昔の姿にたがやさん、折に幸ひ三絃の、ねじめにつれてもてるかく。いき杖の音二上に、乗せて合せてもてるはく、駕籠ももてますはいくく、

えいさくえいさつさ、榮華も夢とは島原の、揚屋をさしてぞ三重うかれ来る、今此里に川竹の、身をば流に島原の、ヨイヨイサヨ、出口の柳ふりわけて、戀と情のヨイサヨ二思、結ぶ契は仇人へヨ、今の妬は誰ゆゑぞ、サイ、世渡るわざの假枕、勤の身こそたよりなやと、便もとめて又爰の、里に名うての太夫職、ぬき八文字の連道中、今日もかはらぬ花の宿、もんじが許に入來れば、幫間の喜作立出で、「ヨウ見事々々、夏花様、冬菊様、二季相並びしお姿、月花は磯一對の珊瑚の玉、色を競べる二人の君は、露情様のほだしの種、いかな天女もほだし裸で遊さんしよ、やつちやく」とほめ詞、ふたりもにつと笑顔して、「又わるがうな事ばかり」と、炬燵にとんと腰打ちかけ、庭の紅梅咲分けて、紅白妍を爭へり。又露情様を爭うてか、お二人の顔がわるい、夏はて悪うても如何しても、夏花は先の逢方、冬先でも萬でも此冬菊は心意氣、夏いや左様はなるまい、冬「たれが」夏「わしが」とせりあふ中へ、夏おつと見え、合指合投とたんの割喧嘩はもらひ、爰で我らが智の字を振ひ、お二人様のお文を、是れ此様に」と縁先の、手拭かけにくより付け、「是でお敵の心を知る狐貮、露情様の見えるまで、奥で飲まう」とそより立つ。嗚、深い浅いは、うへからサマ見えぬヨイナ、底の心は寐にや知れぬ、寐てくしれる、歌ひ打連れ入りにける。座敷には金銀の襖を立て、四方の女郎の貸借に、

出で入る人までも、色どる風の粧は、誠や名に聞きし借錢の都、機嫌上戸の樂も、かくやと思ふばかりの氣色かな。夜晝通ふ露情大盡、色と酒とのもんじが座敷、醉狂閑や阿呆殿の、常附の間に入りにける。爰に喜作が才覺にて、心を引き見る二通の文、手拭かけにかけ置いた。」「ア、恐ろしの傾城の心や、おれが心を見ん爲に、正眞の狐良、思ひりくべく候の油揚げらら。」「なんぢや冬菊より、夏花より、又憎うはない物、開いて見よう。いやくこちらを見ばこちらが恨めよ、あちらを見ればこちらが恨みん。所詮此文見ずに歸らう」往のやれ、我住む宿へ歸ろやれ、足中を爪立て、ちよこくちよこと爪立て、「ア、思へば二人の君が心のたけを書きたる文、ア、儘よ、いやく只恐ろしい、ふつつと止めよ、イヤやめまい」と、行きては歸り歸りては、足もしどろに行悩む。喜作いそぐ、「ヤア旦那、白藏主のお身振どうもく、中々良にかゝらぬ、お前は狐の骨頂、扱此お小袖はお二人の太夫様から」「皆までいふな、是も露情を引見る爲か、外に心は空蟬の、もぬけのから衣、君が移香誰にか被せん、脱ぎはやらじ」と引寄せ抱寄せ、喜そこを喜作がおつ取つて、互に悋氣の花摺衣、片袖ばかり打ちきせて、きせて雉子の雌さま、片袖は雄さま、比翼の取形所望々々。我らは又下男」と、餌刺箒に路次笠も、待てば甘露の日傘、機轉利かしてさしかくれば、「コリヤ出かし

た、是で二人が恨も有るまい、太夫とおれが二人前」左六法右小褻、姿もしやんと振分けて。
限知られぬ、六法アリヤコリヤ 思の淵よ、いつそ沈まば此身もともに、六法沈む里はどこく、
上の町下の町、中のく中の町を通掛に、なんと太夫、久しやく。お前も御無事で嬉しや
く、唄ア、鳥もなけ、鐘もなれく。六法二人寐し夜は往なしたうもまだく、ハッア無い
がさ。喜よいや、露情様の振分姿たまらぬく。何をかくさう、お前の事で二人の君も修羅の
たね、唐土の玄宗皇帝は、雙六の勝負にて、楊貴妃、虞氏君の後定め、例を引いて二人の君に、
手鞠つかせて相方定め」よからうく、おれを抱かうと抱くまいと、ほんのふたりが肩次第、
精一ぱいにつかせい」あつと障子を押開けば、かねて趣向の夏花、冬菊、色を争ふ眞紅の
糸、鞠の心もはずまして、勝たば否應いはさぬと、悟氣妬の千鳥がけ、手玉もゆらにつきそむ
る。喜旦那は鼓弓、我らが三味も、不調ほうけたたとき次第」出次第の、音々に合す手鞠歌、
唄とんくく、とんと諸國の戀のわけ里、数へ数へりや、武士も道具を伏せ編笠で、張と意氣
地の吉原、花の都は、歌で和ぐ敷島原に、勤する身は、誰と伏しみの墨染、煩惱菩提の撞木町
より、難波四筋へ通ひ木辻に、禿達から室の早咲それがほんに色ぢや、一、二、三、四、夜露雪
の日しもの關路も、ともに此身を、馴染かさねて、中は丸山たど丸かれ、と弾き唄ふ。喜おつ

と手鞠は喜作が預、千年ついても取りはづさぬはお前方のたしなみ、お二人の情氣あらそひ、拙者がとんと扱うて、互ちがひのさどめ言、かはゆがつたりがられたり」「それは露情が望む所、誓文ぞ、おりや變らぬ」冬「ハテ主様さへかはらずば、夏花様」夏「冬菊様」二人「二人して大切、いとしがらう」と寄り添へば、「目出たいく、是で御中睦まじし。御祝儀に一踊、旦那諸共サアお立ち」と、喜作が文作高々と、明鼓太鼓三絃の、なりよや見よやな、袖振る姿ふりもよき、四季の榮華の一踊、是を來て見よかしのえ、音頭先揚屋の座敷には、西の三十疊には、黄金のとさん盃に、太夫天神居流れて、園には不老の櫻を咲かせ、春の榮華ぞおもしろや、東の座敷は三十疊に、おねまの屏風ひきならべ、白い肌をあらはして、睦言なんども聞えたり。筒には五色の菊をいけ、秋の景氣に色そへて、廊に花をぞ咲かしける。榮耀にも榮華にも、實に此上や有るべきかと、君と手に手を取りかはし、障子開けばこは如何に、謡畫かと思れば、月又浮けく、春の花さけば紅葉も色濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季折々の榮華も夢なれば、今まで騒ぎし女郎、太鼓の聲と聞きしは窓打つ風、揚屋の座敷も皆きえくと失せはてよ、有りつる昇夫が假の宿、魂膽の枕の上に、眠の夢はさめにけり。露情は夢さめて、「ハア、南無三、扱は夢にて有りけるか、能々思へば、手管諸譯の道辨へる此枕、是も偏に岩本の

神の恵「實に面白や魂膽の、く、色の世ぞと悟り得て、望をかなへかへりけり。義經悦喜限なく、「御代を祝する靜が舞、面白しく。是も偏へに京鎌倉和睦をすべき瑞相」と、悦び御座を立ち給へば、伺候の諸士も壽きて、靜御前の御臺なり、三國一の名將に、隨ひなびく武士も、勇有り智有り仁義有る、三々九郎判官の、御威勢御果報夜に倍し日にまし年にます、實に動きなき源氏の御代、五穀成就民安全、百億萬歳末かけて、治る國こそ三重めでたけれ。

御所櫻堀川夜討終